
最凶皇女・ジーナ（タイトル変更）

月&陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最凶皇女・ジーナ（タイトル変更）

【Nコード】

N0785T

【作者名】

月&陽

【あらすじ】

主人公は、ドラグーンの血を受け継ぐマティス国の皇女・ジーナ。

ジーナ達の暮らす惑星が、魔力の暴発により絶滅に危機に瀕し、同じくドラグーンの血を引くデルタ国の皇子・プログノスと婚約の儀を交わす事になり、物語は幕を開けます。

そんな平和を願うジーナの願いを阻む者達が現れ・・・

友人がキャラデザと原案を担当し、私が文章を担当した作品にな

ります。

とにかく、キャラが濃ゆいです！

プロローグ

太古の昔、魔族が住まう二つの国には、それぞれドラグーンと呼ばれる神竜がいた。

北半球を支配する、ローグラウ・マティス国（以後はマティス国）には、ドラグーン・ローグル。

南半球を支配する、アルグライザ・デルタ国（以後はデルタ国）には、ドラグーン・アルグド。

混沌として未だ定まらぬ魔力を治める為に、魔族達は、ドラグーン達に自分達の王を願い出る。

そこで、ドラグーンと魔族達の間で話し合いがもたれ、それぞれの国から1名ずつ、ドラグーンと交わり、彼等の子を成す巫女が選出される事となる。

神竜とは言え、自分達とは全く違った種族。

年頃の娘達は、皆、恐怖を感じ、自分が選ばれぬ事を望む。

厳正なる詮議の結果、家柄・容姿・知性に優れた娘達が選ばれ、ドラグーン達は、その中から、優れた伴侶を選ぶ事になる。

厳格で真面目な南のドラグーン・アルグドは、彼等の用意した候補者の中から、神官の娘にして、特殊な能力を持ち、生まれながらに盲目のウエリカを巫女に指名した。

一方、少々・・・いや、かなり風変わりな北のドラグーン・ローグルは、候補者を全て嫌だと却下した。そして、偶然見つけた盗賊の女性レベリナを、自分の感性と直感（はっきり言って一目惚れ）で巫女に据えた。

それぞれのなり染めはともかく、彼等の間には無事に王となる子が誕生し、その後、それぞれの国を統治して行く事となる。

それから、しばらくは緩やかで平和な時間が両国に流れていたが、邪な企みを抱く者の出現により、バランスは崩されてしまう。

初代の王より、マティス国では女性。デルタ国では、男性がその

能力と王位継承権を受け継いでいた。

しかし、能力を双子の兄に奪われ、王位を継ぐ事が出来なかった時のデルタ国王の双子の弟が、兄を妬み、懐妊中の王妃に呪いをかけた。

それは、王妃が男児を産めぬ様にする事と、その能力を二分化させる事だった。

結果、王妃が産み落としたのは第1皇女だった。生まれた皇女は女の子でありながら、代々受け継がれた能力を半分だけ有していた。これだけでも、王家や王国にとっては、十分に存続の危機。

だが、それだけでは気が収まらなかったのか、弟は皇女をさらい、魔力とは全く無縁な人間界へとその身を追放してしまう。

皇女の失踪に、王国は湧きたち、その身柄を必死になって搜索をしたが、遂に探し出す事は叶わなかった。

皇女の誘拐を企てた弟とその身内の者達は、その後、兄より死罪を言い渡されたが、最期の瞬間まで、皇女の居場所を明かそうとはしなかった。そして、弟は呪いの言葉を残し、この世から去って行った。

その後、王と王妃の間には、第2皇女が誕生し、その皇女は残りの能力を有してはいたが、デルタ国はこの後、300年の永きに渡り、魔力が定まらない不安定な時期を過ごす事を余儀なくされてしまった。

この時、実は弟の縁者の人物が一人辛くも難を逃れていた事に、誰一人として気がついてはいなかった。

その事がやがて、後の世の3人の継承者達と、マティス国とデルタ国、更には人間界をも巻き込む、存続の危機につながって行く。

運命の齒車は少しずつ軋みながら、ゆっくりと、しかし確実に、その時に向って行く事となる。

風変わりな皇女と、優雅な皇子のそれぞれの思惑

時は流れて、300年後のマティス国。場所は王宮。

一人の女性が、優雅かつ、それでいて急ぎ足で廊下を歩いている。背筋をピンと伸ばし、顔は真っ直ぐに正面を見据えながらも、女性の落ち着きはない。どうやら、誰かを探しているらしい。

この女性の名は、スフィア^{II}ヘルプスト^{II}セルジェルタ（通称はフィア^{II}）。マティス国の第1皇女付きの侍従長である。子爵の家柄の出身で、家族は両親と2人の兄レクトとロゼオの5人家族。その容姿は、腰までの漆黒の艶やかな髪をポニーテールのように一つの束ね、その上からふわりとしたレースのリボンで結わえ、同じく切れ長の漆黒の瞳。年齢は20歳。身長は165cmで、体系はすらりとしているが、プロポーションは整っており、大きく前に飛び出したFカップには、男のみならず、女ですら目がいく。容姿は整っており、かなりの美貌の持ち主だ。武器は鞭を手足の様に操り、封じの魔法を得意としている。（女王様タイプ？）頭も良く、何でもそつなくこなしてしまうフィアだが、そんな彼女にも、思い通りにならない事、いや人物が一人いた……。

「ああ、あなた達。姫様をお見かけになりませんでしたか？」

フィアは、通路の向こうから歩いて来る侍女達を見つけ、彼女達に尋ねる。

「フィア様。姫様でしたら、先程ご自分のお部屋に戻られ、詩を朗読されるとおっしゃられておられましたわ」

フィアに軽く会釈をし、侍女が微笑みながら答える。

「……詩を朗読？」

侍女の言葉を聞き、フィアは彼女達には気づかれぬ様に、軽く頬を引きつらず。

「はい。姫様は何時もお淑やかで、私達のあこがれですわ。まさに、

淑女の鏡ですもの。あの優雅な身のこなし、細くくびれたウエスト。コルセットもパニエも、姫様の為にある様なものですわ。勿論、フィア様も、私達の憧れですが」

もう一人の侍女が、うつとりとした様に胸の前で手を組み、フィアに話し掛ける。

この国の女性の衣装は、人間世界の中世ヨーロッパの貴族の衣装に似ている。女性は、ウエストが細ければ細いほど美しいと評され、コルセットで内臓が出そうなほど締め上げられたウエストをより強調するのが、ドレスのスカート部分を膨らませているパニエだ。王族や、王宮で仕える者達は、皆が黒いドレスを身にまとう様、しきたりで古より定められている。その為、フィアも胸元が少し大きく開いたドレスを着用している。

「姫様がお聞きになれば、きつと喜ばれる事でしょう」

侍女からの褒め言葉を、フィアは引き攣った笑みで受ける。

自分とはかく、あの姫がこの侍女の言葉を聞けば、一体どんな顔をするのやら？

主の本当の姿を知るフィアには、侍女達の言葉は滑稽でしかない。「では、私はこれで……。御機嫌よう」

ともかく、目的の人物の居場所が分かった為、フィアは侍女達に優雅に微笑みかけ、その場を足早に立ち去って行く。

「フィア様も素敵よね。抜群のプロポーションに、あのお綺麗なお顔。それに頭脳は明晰だし、何でもお出来になる」

「本当。天は、二物も三物もお与えになるものよね。あの細いウエスト……。」

立ち去るフィアの細くくびれたウエストを羨ましそうに見つめ、侍女は自分のウエストに視線を移す。

「私、もつときついコルセットをする事にするわ」
「私も」

決して太い訳ではないが、少し緊張感のない自分のウエストを触り、侍女達は頷き合い、そのまま仕事へと戻って行く。

「姫様、入りますよ」

目的の人物の部屋の前に辿り着き、控え目のノックをした後で、ファイアは扉を開く。ここは、このマティス国の第1皇女、クラベジーナ（通称ジーナの為、以後はジーナ）の自室。

「お入りなさい。今、とても面白いところなの」

大きく切られた窓際のソファに軽くもたれ、一人の少女が熱心に本を読んでいる。

大抵の者ならば、この光景を鵜呑みにし、ジーナはお淑やかだと納得をするのだが……。

「ジーナ様。私には、そんなまやかしは通用しませんよ」

深い溜息を吐き出した後で、ファイアは空中に手をかざし、何かを探し始める。やがて、その手が目的の物に行きあたり、ファイアはそれを力一杯破壊する。

途端に、今まで窓際で大人しく詩を朗読していたジーナの姿はかき消え、部屋の様子もがらりと様変わりする。

先程までは、黒で統一された落ち着いた部屋が、たくさんのトレーニング機材が並べられた空間へと早変わりしていた。そこはまるで、トレーニングジムの様だった。

バシッ！ドカッ！

凄まじい叩きつける音の先を辿ると、一人の少女が熱心に、天井からつり下げられたサンドバックに、パンチや蹴りを叩きこんでいる。

「ちょっと！ファイア、入って来るのは構わないけど、私のかけた魔法を解くのは止めてくれない？折角、目くらましをかけてあったのに」

相変わらず、サンドバック相手に暴れながら、部屋の主の少女はファイアを軽く睨む。

この少女の名はクラベジーナ「ベルジュア」ノーヴェン（ジーナ）

。マティス国の第1皇女にして、ドラグーンからの力を受け継いだ能力者である。その容姿は、背中までの少しパーマがかかった漆黒の癖毛に、気の強そうな大きな黒い瞳。身長は162cmで、筋肉で引きしまった無駄のない体型をしている。年齢は16歳。可愛らしい顔をしてはいるが、侍女達が話していた様な、淑女とは無縁な印象を受ける。ジーナは魔法よりも、拳で闘う事を得意としており（いわゆる格闘馬鹿？）、その威力は、惑星を一つ潰すとか潰さないとか……。だが、実際には人前で拳を振るう事はないので、ジーナが格闘を得意とする事を知るのは、今のところはフィアと、彼女に格闘を教え込んだ師とも呼べる人物の2人だけである。

「……ジーナ様。また、その様なはしたない格好をされて……」
相変わらず、サンドバック相手に暴れまわっているジーナの姿を見て、フィアは眉根を潜める。

先程述べた、フィアの思い通りにならない人物とは、彼女が仕えるこのジーナの事だ。

今のジーナは、真っ赤なタンクトップに、白のスエット、足元は素足に雪駄履きという、到底、王族としては考えられない様なラフ過ぎる恰好だ。マティス国には、基本黒い衣装・備品しか存在しない為、これらの全ては、ジーナが人間界から通販で勝手に取り寄せた物である。

次に、フィアが自分の足元に視線を落とすと、そこにはズタズタに裂かれた漆黒のドレスと、徹底的に破壊されたコルセットとパニエと思われる残骸が転がっていた。

「……またですか」

床の上にしゃがみこみ、フィアはぼろ屑にされたドレスとコルセット、そしてパニエに手をかざし、それらを元の形に復元させる。

「余計な事をしないでよっ！」

フィアをぎろりと睨み、ジーナはサンドバックから離れる。

「どうして、公儀の場の様に、大人しくしている事がお出来にならないのですか？」

今は水筒に入ったスポーツドリンク（これも、人間界からのお取り寄せ）をストローで飲んでいるジーナを見つめ、フィアは溜息をつく。

侍女達が話していた通り、第1皇女として淑やかに振る舞う一面も、ジーナは持ち合わせている。公儀（自分の部屋以外の場所）の場では、常に日向の様な笑みを浮かべ、立ち居振る舞いはこれ以上なく淑やか。だが、それはあくまで、ジーナの最大の猫かぶりに過ぎない。

本来のジーナは、コルセット・パニエ・ふわふわした物を徹底的に嫌い、部屋に戻ると、必ず壊してしまうのだ。

それを、ジーナの正体を知る数少ない人物であるフィアが、何時も修復している。毎日がその繰り返し。

「別にいいじゃない。皆の前では、理想的なお姫様をやってるんだから。何て言うの？あの『ほほほ、御機嫌よう』みたいな顔をしてると、全身に蕁麻疹が立ちそうになるのよ。あたし、そんな柄じゃないし。それに、大嫌いなものよ。コルセットもパニエも！私が女王になった暁には、一つ残らず破壊してやるんだから！」

今度は、タオルで汗を拭いながら、ジーナは嫌そうに身を震わす。「……全く。それでも、あなたはこのマティス国の第1皇女ですか。これでは、この国の未来が思いやられます……」

そう言い、フィアはこれ以上ない位の溜息を吐き出す。

どうしてよりもよって、こんな型破りなジーナに、王位継承権たる能力が出てしまったのか……。

マティス国・デルタ国に関わらず、王位継承権は、代々能力が現れた者に継がれて行く仕組みになっている。それが末子であろうとも、その条件は絶対だ。

ジーナには、女王とその伴侶の国王の両親の他に、3人の妹ダリーエ・シルエラ・マリニがいるが、彼女達には、その能力は現れなかった。

「そうよね、私も時々そう思うわ。こんな能力さえ出てなかったら、

今頃は気ままに旅にでも出られていたのに。妹達の誰かに、能力が出ていれば良かったのにね。別に、皇女なんて生まれたくはなかったわ。しきたりや掟に縛られ、自由を奪われた籠の中の鳥みたい。息が詰まりそう・・・」

フィアの意見に同調し、ジーナは現実逃避する様に、窓の外に視線を移す。

上等な絹のドレスに身を包み、姫様と傳かれたとしても、ジーナにとっては幸せとは言えない。

ジーナが望むのは、本当の自分を偽らなくても良い世界。

自分に能力が出てしまった事や、皇女に生まれてしまった事は嘆いても仕方がないし、ジーナ自体、その様な女々しい事を考える性質ではない。だが、言いたい事も言えず、やりたい事も出来ないと思うと、ジーナは時々叫びたくなる事がある。

だからこそジーナは、コルセットを自分の与えられた地位、パニエを受け継がれた能力、ドレスを周囲から押し付けられた理想の王女としての自分に置き換え、徹底的に嫌っているのだ。

「それで、私に用があつて来たんじゃないの？」

しばしの沈黙の後で、ジーナがフィアに用件を尋ねる。

「ああ、そうでした。明後日、プログノス様の御一行が、この国に訪問されるそうです。ジーナ様とプログノス様の婚約の儀が整い次第、盛大な晩餐会が催される予定になっております。ジーナ様はダノスの練習をなさっておいて下さい。それと、くれぐれも失礼のない様に願います」

ジーナに促され、訪れた用件をフィアが思い出した様に告げる。

プログノスとは、デルタ国の第1皇子にして、ドラグーンの能力を受け継いだ王位継承権者だ。そして、この度、ジーナの夫となるべく、婚約を交わす相手でもある。本来なら、能力者同士の婚姻などはあり得ないのだが、300年前の呪いのせいで、デルタ国のみならず、マティス国にも魔力の乱れが生じ始めている為、両国の間でこの婚約が結ばれる事となった。

言うなればこの婚約は、2つの国が1つに統合される事を意味している。

「……………」

フィアの言葉を聞き、ジーナは嫌そうに顔をしかめる。

別に、ダンスが出来ない訳ではない。それどころか、ジーナの優雅で華麗なダンスは、国でも知らぬ者がいないほどだ。

それに、プログノスとの婚約が不満な訳でもない。王族として生を受けた以上、自由な恋愛や婚姻は一切許されてはいない。ましてや、ジーナは未来の女王として、マティス国を背負って立つ身の上。相手がプログノスでなくとも、ジーナの意志など一切無視して、精零潔癖な夫をあてがわれる事だろう。

むしろ、ジーナが嫌っているのは、あの馬鹿らしい騒ぎの中で淑女として振る舞う事の方だ。

そう、大嫌いなコルセットで締め付けられ、パニエをはかされ、ふりふりのドレスを着せられて……。

「その様な顔をされても駄目ですよ。何時もの様に、最大限の猫を被って頂きます。ドレスもコルセットも、後ほど新調させていただきます。何と云っても、ジーナ様におかれましては、晴れの日となられるのですから。それまでに、この素敵なお部屋を元通りに片付けておいて下さい」

嫌そうに頬を膨らませているジーナに、フィアはにっこりと微笑み、修復を済ませたドレス一式を手渡す。フィアが言う元通りとは、先程の様な皇女らしい部屋に、魔法で幻惑をかけておけという事だ。

「ちよつと、これ……?」

フィアに手渡されたコルセットを見ていたジーナは、ちよつとした異変に気づく。

「はい。修復と同時に、サイズを更に小さくさせていただきました。それと、強度も上げておりますので、今度は簡単には壊れませんよ。より美しい、くびれたウエストが出来ます。きっと、プログノス様も、満足なさると思います。くびれは、魔族の女性にとって

は命も同然ですから」

ジーナに、更にコルセットをきつくした事を告げ、ファイアは微笑む。

ジーナは、魔法で壊そうとするも、技術はファイアの方が上な為、ひび一つ入れる事も出来ない。

「・・・鬼、悪魔。魔法が駄目でも、自慢の拳で粉々にしてやるんだから」

そんなファイアを、ジーナは半眼で睨む。

「いくらでも、お好きになさって下さい。今回は、形状記憶の機能を埋め込んでおりますので、壊せば壊す程、コルセットは益々きつくしまつて行く事になりますよ。これ位の事が出来なくては、マテイス国女王とされるジーナ様の侍従長として、お仕える事は出来ませんから。では、後ほど」

ジーナに優雅に一礼をし、ファイアは部屋を去って行く。

「・・・ドS・・・」

そんなファイアの背中に、ジーナは舌を出し、悪態をつく。

まあ、主が主なら、それに仕える侍従長も侍従長といったところか。

世間の者達が知らない闘いが、こうやってジーナとファイアの間では、毎日、休む事無く繰り返り広げられている。

一方、こちらは場所が変わって、同時刻のデルタ国。場所は王宮。一人の見目麗しい青年が、王宮の自室から続くテラスの椅子に腰かけ、端正な顔を曇らせている。その瞳は、一見、庭に咲く花達を愛でている様に見受けられるが、今の青年の目には何も写ってはいなかった。

彼の名は、プログノスⅡバラウセアⅡインビエルノ。（以後はプログノス）デルタ国の第1皇子にして、ドラグーンの能力を受け継いだ次期王位継承者。家族は、国王の父と王妃の母。それと、双子

の姉のフィアの4人家族。その容姿は、肩までのさらさらとした紅い髪に、ワイン色の涼やかな瞳。年齢は24歳。身長は182cmで、すらりとした体系をしている。何より人目を惹くのは、プログノスの容姿だ。女性以上に容姿は整い、見る者は溜息を洩らさずにはいられない。プログノスの耳は、軽くとがっている。彼ばかりではなく、デルタ国の者達は皆がそうだ。その起源は、この国を守護するアルグドの血脈からきているらしい。武器は針を使い、魔法の腕も超一流。このデルタ国伝統の白い装束に身を包んだプログノスは、言うなれば全てが備わった理想の皇子様だ。

「また、その様なお顔をされて」

軽いノックの後で、同じく白い装束に身を包んだ少年が、盆を手にプログノスに近づいて来る。

彼の名は、ルクサリオ「マルティス」リム。(以後はルクサリオ)元はマティス国の出身だが、現在はデルタ国にて、プログノスの侍従長として仕えている。公爵家の出身で、家族は父と他界をした母一人っ子の為兄弟はいない。現在、父親が再婚をし、後妻を迎えている。その容姿は、短いショートカットの黒髪に、優しげな黒い瞳。年齢は18歳。身長は178cmで、こちらもかなりの美少年だ。何時もにこにこ笑い、人懐っこい印象を人に与える。ルクサリオの耳もとがっており、先祖にデルタ国の者がいたらしく、たまに混血。戦闘はあまり得意ではないが、召喚魔法を得意とし、頭脳が明晰な為、将来を有望視された少年である。

「・・・ルクサリオか」

側に来たルクサリオに一瞬だけ目をやり、プログノスは再び庭を見つめる。

「元気がありませんね。そんな時は、このホワイトローズティを飲まれるといいですよ。何でも、精神を安らぎに導く効果があるそうです。それと、よろしければこちらもお召し上がり下さい」

そう言い、ルクサリオは穏やかに笑いながら、プログノスの前に温かな湯気かのぼる紅茶と、小さな皿に乗せられたクッキーを差し

出す。

「美味しいな。お前が淹れてくれるお茶は、何時も私の心を癒してくれる。それと、これはお前が焼いたのか？」

ルクサリオの紅茶を口に運び、プログノスは表情を和らげ、クツキーを手に取る。

「ええ。非常に珍しい木の実が手に入ったので、生地の中に練り込んでみました」

「これも、美味しい」

クツキーを口に運び、プログノスは微笑む。

「喜んでいただけで何よりです」

そんな主の様子に、ルクサリオは本当に嬉しそうに笑う。

「・・・私の力が、完全であったならな・・・」

やがて、プログノスは浮かべていた笑みを消し去り、再び庭に視線を移す。

300年前、一人の男の愚かな嫉妬により、本来なら一人の継承者に受け継がれて行く能力は、生木を裂く様に2つに引き裂かれてしまった。半分は誘拐された第1皇女が持つて行ってしまった為、現在のデルタ国の王族には、第2皇女からの残りの半分しか受け継がれていない。この300年の間、消えた皇女の行方を捜し続けているが、未だに何の情報も得る事は出来てはいない。その為に国は乱れ、王族としての彼等の地位も危ぶまれている有様だ。

それを改善すべく、今回、マティス国の皇女・ジーナと、プログノスの婚約が交わされる運びと相成ったのだ。

「全力で探していますから、きっと見つかりますよ」

「・・・だといいいのだが。このままでは、我がデルタ国が、マティス国の助けにすぎたようではないか。あまりに情けない・・・」

そう言い、プログノスは益々、顔を曇らせて行く。

「また、その様な事を。明後日には、プログノス様の晴れの日を迎える事になるのですよ。おめでたい事じゃないですか。クラベジーナ皇女様と言えば、非常に愛らしく、淑やかな方らしいですよ」

表にのみ伝わっているジーナの噂を間に受け、ルクサリオはプログノスに明るく話す。

「知っている。公儀の場で数度、言葉を交わした事がある。マティス国の伝統の黒いドレスが良く似合う、愛らしい姫君だった。私の知る中では、あれ程見事に、コルセットとパニエを着こなしている者はいない筈だ」

プログノスは、過去に数度だけ謁見した事があるジーナの姿を思い浮かべる。

ジーナとは対照的に、プログノスは女性の細いウエストと、華麗なシルエットをとても気に行っている。このデルタ国の女性の装束も、マティス国とよく似ている。ただ、大きく違う所があるとすれば、この国の衣装や備品は白で統一されているところか。

「プログノス様は、コルセットとパニエを着こなした女性がお好きですからね。いいじゃないですか。この度の婚約は、正に理想的なものになりそうですね」

「身分に文句はない。クラブジーナ皇女の容姿も不満ではない。だが、私は淑女という者が好きではないのだ。大人しいだけが取り柄の、深窓の皇女など・・・」

ルクサリオの言葉に、プログノスは嫌そうに顔をしかめる。
涼し気な風貌のプログノスだが、その好みは少し変わっている。

彼は、コルセットとパニエで正装した女性が大好きで、更に、気の強い女性が好みなのだ。その為、ジーナを噂通りの淑女だと思い込んでいるプログノスには、この度の婚約は何処か物足りない。

最も、ジーナの本来の姿を目にすれば、プログノスは一体どう思う事になるのだろうか？

「いいじゃないですか淑女。オレの婚約者は、最高の淑女なんですよ。プログノス様に同行しマティス国に訪問すれば、彼女に会う事が出来ます。益々、綺麗になっっているんでしょうね」

プログノスとは違い、淑女が好きなルクサリオは、マティス国にいる自分の婚約者の事を思い、嬉しそうに笑っている。

「ああ、そうだったな。確か、お前の婚約者は、クラブジーナ皇女の侍従長をしていなかったか？」

「はい。フィアって言います。クールで美人で頭が良くて、何でも出来るんですよ。初めて会った時から、オレの女神はフィアだけなんです？」

主であるプログノスの前でも、ルクサリオは婚約者であるフィアの事を、公然とのろける。

フィアとルクサリオの出会いは、彼等が幼少の頃に遡る。当時、まだマティス国にいたルクサリオは、とある舞踏会で、彼にとつては運命の出会いを果たした。フィア8歳、ルクサリオ6歳。利発そうな顔をした美少女のフィアに、年上好きのルクサリオは一目惚れ。父親に我がままを言い、遂にはフィアとの婚約まで結んでしまったのだから、一途な少年の思い込みというのも中々に侮る事は出来ない。

最も、そんなルクサリオも、フィアの表面ばかりを見ていて、本来の彼女のドSで女王様な性格は知らない。

「羨ましい奴だな。まあ、心底惚れた相手と結婚が出来るのであれば、それ以上の幸せはないだろうが」

そんなルクサリオを、プログノスは半分呆れた様に見つめている。王族は勿論、貴族にも、当然自由恋愛は許されてはいない。なので、ルクサリオの様に、自分が望んだ相手と婚約をかわせる事は、皆無に等しい。

「きつと、プログノス様も、クラブジーナ様の事を好きになる事が出来ますよ。何より、お2人の婚姻が、この世界の崩壊を救う事になるのですから」

真剣な表情を作り、ルクサリオは希望に満ちた眼差しで、プログノスを懇願する様に見つめる。

「・・・そうだな」

プログノスは、静かに頷く。

この際、自分の好みや感情などはどうでもいい事だ。

自分の能力が半分しかない今、国の存続を救う事こそが、未来の国王としての自分に課せられた運命しめいなのだろう。

「・・・？」

その時、プログノスは、自分を何処から見据える、まわりつく様な視線を感じる。

それは、痛く全身に突き刺さる、殺意にも似た血潮の様に生臭い悪意。

周囲を見渡すも、この場所には自分とルクサリオの2人しかいない。「プログノス様？どうかしましたか？」

突然、周囲をきよろきよろと見渡したプログノスを訝しり、ルクサリオが問いかける。

「・・・いや」

自分の気のせいだと、プログノスは自身に言い聞かす。

しかし、胸の中に芽生えた不安は、中々消えてはくれなかった。

それどころか、紙に落ちたインクのように、じわじわとプログノスの心の中に広がって行く。

何か、とんでもない事が起こりそうな気がする。

そう、世界を揺るがす様な大惨事が・・・。

ドラグーンの能力を受け継いだプログノスは、ぼんやりとだが未来を視る事が出来る、預言者的な能力を持っていた。

言い知れぬ不安はあったが、プログノスはあえてそれを口にはしなかった。

言葉に出してしまえば、現実になってしまいそうで、それが怖かったのだ。

だがプログノスの危惧した通り、やがてそれは、現実のものとなって行く。

婚約の儀と、動き始める闇

時間は流れ、ジーナとプログノスの婚約の儀が交わされる当日。

マテイス国の自室で、ジーナはこの日の為に用意された衣装を、侍女達に着せられていた。侍女達は楽しげに、何時もよりも更にきついコルセットでウエストをこれ以上なく締め上げ、更にはパニエを重ね、伝統を重んじつつも流行のドレスで、ジーナに飾って行く。淑やかな皇女を演じ、日向のような笑みを浮かべながら、ジーナは、何時この侍女達を殴り飛ばしてやろうかと、腹の中で何度もシユミレーションを重ねていた。

「ジーナ様、お綺麗ですわ。新調をしたコルセットもパニエもドレスも、皆がジーナ様の為に生み出された様です」

そんなジーナの迷惑を知りながら、フィアはにっこりと微笑み、主にしつかりと釘を刺す。

猫をしつかりと被っておけと・・・。

「ありがとうございます。何だか、照れてしまいますわ」

表面上では恥じらう演技をしながら、ジーナは腹の中でフィアを睨む。

一見、穏やかな光景だが、ジーナとフィアの闘いは、今日も水面下で密かに繰り広げられている。

「さあ、出来ましたわ」

「ジーナ様、本当にお綺麗です」

「ジーナ様程、コルセットとパニエがお似合いになるお方はおられませんわ。本当に、細くて素敵なウエスト」

ジーナの髪を結び上げ、最後に薄く化粧を施した後で、侍女達は嬉しそうに騒いでいる。

鏡の中に映ったジーナは、部屋で暴れている時とは、全くの別人だった。

白い陶器の様なきめ細やかな肌に、大きな黒い瞳。元々顔立ち

整っている為、等身大の人形の様だ。侍女達が褒め称える様に、ジーナのウエストはこれ以上なく細く、魔界一と言つて良いほど、ドレスを着こなしたシルエツトは美しい。強い意志を秘めたジーナは気品にも溢れており、彼女の姿を目にした者は、その気高い凜とした美しさに思わず目を奪われる。

そうして、勝手につけられたジーナの表の通り名は、ブラック・ダリア漆黒の淑女だった。

勿論、ジーナはこの通り名を忌み嫌っている。

コルセットやパニエ同様に、いつかは粉々に粉碎してやろうと企んでいる位に……。

「……ジーナお姉様」「」

そこに、ジーナの3人の妹達が顔をのぞかせる。

「お姉様、本当にお綺麗」

まん中の妹・シルエラが、ジーナのドレス姿に目を輝かす。

「いいなあ。マリニも、そんな綺麗なドレスを着てみたいなあ。でも、マリニはジーナお姉様みたいに細くないし……」

1番下の妹のマリニが、ジーナと自分のウエストを見比べて、可愛らしい唇を尖らしている。

「大丈夫ですよ、マリニ様。ウエストなど、コルセットをつければ、いくらでも細くなりますから。そうですね、ジーナ様？」

マリニに微笑んだ後で、フィアはジーナに会話を振る。

「そうですね。急がなくても、マリニは今そのままが良いのです。時が来れば、あなたも素敵な貴婦人になれますよ。私が、保障致します」

フィアを軽く睨みながら、ジーナはマリニに優しく微笑む。

ジーナは、家族の前でも自分をいつわってはいいるが、心の底から、両親と3人の妹の事を愛している。

「でも、ジーナお姉様だったらズルいわ。あの白薔薇の貴公子のプリンス・ローズプログノス様と婚約をなさるなんて」

そう言い、1番上の妹・ダリーエは頬を膨らます。

この白薔薇の貴公子というのは、プログノスの通り名である。容姿端麗・物腰柔らか、その上、魔法の腕は魔界一と、何処にもけちのつけようがなく、いつの間にか彼はそう呼ばれる様になっていた。魔界の女性達は、マティス国・デルタ国の違いに関わらず、皆、プログノに恋い焦がれている。年頃を迎えたダーリエも、また然りだった。

「ダーリエ。この度の婚約は、遊びではないのですよ。我がマティス国と、プログノス様のおわすデルタ国の危機を救う為の、最善の手なのです。私達の婚姻により、両国には平穏が取り戻される筈です。あなたは、このマティス国の第2皇女。その事を、しっかりと理解しておかねばなりませんよ」

自分自身にも言い聞かす様に、ジーナはダーリエを静かに諭す。

「はい。でも、やっぱりお姉様は素敵？ダーリエは、この世界でジーナお姉様を一番尊敬してますもの。ジーナお姉様、大好き？」

ジーナに神妙に頷いた後で、ダーリエは頬を赤らませ、ジーナの胸に飛び込む。

「ああつ、ダーリエお姉様ったらずるいつー！」

頬を膨らませ、マニエもジーナに抱き付く。

「じゃあ、シルエラも。きつと、素敵な光景なんでしょうね。漆黒の淑女のジーナお姉様と、白薔薇の貴公子のプログノス様が並ばれた光景は・・・」

最後にジーナに飛び付き、シルエラはうっとりとした様につぶやく。

「・・・」

その言葉には、ジーナは何も答ええない。ただ、妹達の体を、力強くギュッと抱きしめる。

自分の思惑はともかく、プログノスとの婚約で不安定な魔力を抑え込む事が出来るのなら、ジーナにとっても望むべき事態には変わりはない。

大切な彼等を護りたい。

ジーナは一人、胸の中で決意を固める。
そんなジーナを、フィアは静かに見つめる。

普段のジーナは自由を好んでいるが、誰よりも国やそこに暮らす全ての者達を愛し、護りたいと考えている事を、側に何時も控えているフィアは良く知っている。

「ちよつといいかな？」

軽いノックの後で、一人の紳士が姿を現す。

彼の名は、ディオルス・ベルグ・ノーヴェン（通称ディールの為以後はディール）。ジーナ達の母の実弟で叔父にあたる人物。家族は、妻と3人の子供達。その容姿は、肩までの柔らかな黒髪を左側で一つに束ね、同じく艶っぽい黒の瞳。年齢は36歳で、身長は181cmのすらりとした細見。容姿は整い、物腰は優雅で柔らかか、見た目は実年齢よりもずつと若く見える。

「『ディール叔父様』」

妹達は、入ってきたディールに視線を移す。

「今日の婚約の儀の事について、ジーナと大切なお話があるんだ。ダリーエ・シルエラ・マリニ。申し訳ないけど、少し席を外しては貰えないかな？」

穏やかな微笑を浮かべ、ディールはダリーエ達に退出を促す。

「わかりました。では、ジーナお姉様、後ほど」

ディールに頷き、ジーナに挨拶を済ませ、ダリーエ達と侍女達は部屋を出て行く。そんな彼女達を、ディールは穏やかに見送る。

後に残ったのは、ジーナとフィア、そしてディールの3人のみ。

「それで、お話というのは？」

ジーナが、ディールに尋ねる。

パタン……。静かにドアが閉じられ、ディールはジーナに背を向けたまま、体を小刻みに震わせている。

「……してよ……」

「……は？」

ディールが小さな声で何かをつばやいたが、良く聞こえなかった

為、ジーナは問い返す。

「・・・だから、どうしてあんななのよ！酷いじゃない！よりもよって、プログノス様と婚約だなんてえ！」

そう言い、振り返ったディールの様子は、先程とは違って変わっていた。男らしい普段の様子は一切消え、女のように体をくねくねとさせている。

またか・・・。

ジーナとフィアは、言葉には出さず、深い溜息を吐き出す。

このディールという人物は、現・女王の実弟にして、格闘のスペシャリスト。その物腰は常に優雅で隙がなく、王宮での信望は非常に厚い。美しい妻と3人の子供達をこよなく愛し、良き夫であると同時に、良き父親でもある。

しかし、それはあくまで表の顔に過ぎない。

本来の彼（彼女？）は、男の体の中に、女の心を宿している。

簡単に言ってしまうと、乙女男おかまとも言うおうか。

ともかく、普段の物わかりのいい男らしい彼は、ジーナ同様に、ディールの精一杯の演技なのだ。

その事を知っているのは、ジーナとフィアの2人だけである。

ちなみに、ジーナの格闘の才能を見抜き、腕っ節強く育て上げたのは、他ならぬこのディールである。よって、ディールもジーナの本性を知っている。

フィアは、本性を隠す為に完璧な演技をするこの2人を、似たもの同士の遺伝だと、勝手にひとまとめにしている。

「ずるいわあ！あんまりよ！ジーナのバカバカア！」

ジーナの体をポカポカと叩き、ディールは恨めしそうに姪を睨む。「・・・あのね、叔父様。ずるいもなにも、仕方ないでしょ？これは、国同士が決めて、ドラグーンも承諾した事なんだから」

ディールを見上げ、ジーナは大人が子供に話しかける様に言い聞かす。

「知らないわよ、そんな事！いい、ジーナ。あんたが結婚するのは、

抱かれない男NO・1のプログノス様なのよう。ああ、あの涼しい目で見つめられたら、ゾクゾクしちゃう？ギョツとして欲しいわ、ギョツと・・・」

自分の妄想の中にどっぷりと浸かり込み、ディールは何もない空中を抱きしめ、体をよじっている。

そんなディールの様に、ジーナとフィアは目配せをし合う。

「・・・叔父様。そんなんで、よく結婚できましたね・・・」

何時もの口調に戻り、ジーナは呆れた様にディールを見つめる。

「だって、仕方無いじゃない。体は男なんだから。お嫁には行かして貰えなくて、妻をとれって言われたんだから。でも、うちの奥さんだけは平気なのよね。奥さんの前だけでは、男になれちゃうんだから、自分でも不思議だわあ。他の女じゃ駄目ね。この世界中で私が抱ける女は、奥さんただ一人よ。それに、私達の愛の結晶達も可愛いし。でもね、本当は、いい男に抱かれないの？私って、生まれてくる性別を間違えたのよう。ああ、これ以上ない悲劇だわあ。なんて可愛そうな、あ・た・し・・・」

ジーナの問いに答え、ディールはがっくりと肩を落とし、出てもない涙を拭う素振りをする。

「じゃあ、私と代わりますか？」

自分が着ているドレス一式を指差し、ジーナがディールに話し掛ける。

「いいのお？」

ジーナの言葉を聞き、ディールは目を輝かせている。

「それは駄目です。ジーナ様も、ディール様もいい加減になさって下さい。いいですか、ディール様は男です。従って、プログノス様の花嫁にはなれません。それに、ドラグーンの能力もお持ちではないでしょう。ジーナ様も、ジーナ様です。この国の未来の女王陛下は、あなた様以外にはおられないんですから」

何時までも続きそうな不毛な会話を終わらせる為に、今まで口をつぐんでいたフィアが、ジーナとディールにこんこんと言い聞かす

ように説教をする。

「わかつてるわよ。ちょっと、叔父様をからかったただだから。それに、私だつてこの婚約に未来をかけているんだから。1日も早い、この世界の平定。その為なら、私は何だつてするわよ。私は、このマティス国の第1皇女・クラベジーナ「ベルジュア」ノーヴェンよ。その事に誇りを持つているし、自分の定められた運命からは逃げるつもりもない。それは、プログノス様だつて同じだと思ふの。だから、叔父様には悪いけど、代わつてあげる事は出来ないわ」

強い決意の籠つた瞳で、ジーナは自分意思をフィアに告げる。

「それでこそ、私がお仕えするジーナ様です。」

フィアは、満足そうにっこりと微笑む。

「あんたつて、思つてたよりいい女ね。姪じゃなかったら、付き合いつてあげられたかも。まだまだ子供だと思つていたけど、何時の間にか大人になつていたのね」

デイルは、少々危ない発言をしながら、ジーナを眩しそうに見つめている。

そこに、婚約の儀の時間が訪れた事が告げられ、ジーナは何時もの淑女に、デイルは紳士に戻り、フィアと共に大聖堂へと向い始める。

それでも道すがら、諦めきれないデイルは、ジーナの耳元でプログノスを一晩だけいいから貸して欲しいと囁いていたが、最後にはフィアが鞭をちらつかせ黙る様に圧力をかけて来た為、最後には悔しそうに引き下がっていた。

ジーナは信じていた。

自分達の結ぶ婚約が、二つの国の未来を救う事になると……。

先を見通す能力を持たないジーナは、この先に起こる不吉な予兆が、自分達の直ぐ側にまで忍び寄つて来ている事に、全く気づいてはいなかった。

ジーナ達が大聖堂に辿り着くと、そこには、王候貴族達が正装し、左のマティス国、右にデルタ国と綺麗に別れ整列していた。

「フィア、久し振り」

人なつこい声が響き、フィアが声の主を辿ると、プログノスに付き添ったルクサリオが、引きちぎれそうな程手を振りながら歩いて来ていた。

「ルクサリオ、久し振りね。お元気そうだなにより」

久方振りの婚約者との再会に、フィアは微笑む。

「やっぱり、益々綺麗になって？本当は、ここでギュツとしたいんだけど、皆が見てるから今は止めておくよ」

フィアの耳元でこっそりと小声でつぶやき、ルクサリオはお預けを食らわされた犬の様に、可愛らしい顔色を曇らせる。その頭には、しよげた犬の耳が似合いそうだと、フィアは苦笑する。

ルクサリオとは違い、フィアは特に自分の婚約者に愛着を抱いている訳ではない。だが、自分を幼い頃より変わらず慕ってくれるルクサリオは、フィアにとっては可愛い弟の様な存在だ。

「あら。こっちの坊やも美味しそう？」

フィアに聞こえては、今度こそ鞭で縛りあげられそうなので、デイルは紳士の外面のまま、おねえ言葉で本当に小さな声でぼそりとつぶやく。

やがて、フィアとデイルは黒いマティス国の群衆に、ルクサリオは白いデルタ国の群衆へと、本日の主役のジーナとプログノスに祝辞を述べ、それぞれ溶け込んで行く。

「クラブジーナ殿、本当にお美しい。私は、デルタ国の第1皇子のプログノス、バラウセア、インビエルノと申します。この善き日に縁を結び、未長く両国の安寧の為に手を携えて参りましょう」

世の女性達&デイルが見れば、気を失ってしまいそうな笑みを浮かべ、プログノスはジーナに話し掛ける。

「いえ、私など、プログノス様の美しさの前では霞んでしまいますわ。私は、マティス国の第1皇女・クラブジーナ、ベルジュア」

ーヴェンと申します。どうか、ジーナとお呼び下さい。私達の婚姻が、両国に安寧をもたらす事を、私も信じております。どうか、長くお側にお置き下さいませ」

何時ものしおらしい淑女を演じ、ジーナは日向の様な笑みを浮かべ、恥ずかしそうに頬を赤らめて見せる。

この時の互いの印象は、まあ通り一遍のもの。

ジーナはプログノスに対し、確かに噂通りの男前で、責任感がありそう感じた。

プログノスは、コルセットとパニエの着こなしが美しい、深窓の皇女だと感じていた。

お互いが真に望んでの婚姻ではなかったので、当たり前と言えは当たり前前の評価とも言えよう。

何はともあれ、婚約の儀式の開始を告げる音楽が響いた為、差し出されたプログノスの腕に戸惑いながら（勿論、演技）手を回し、ジーナは両国王・女王の元へとゆっくりと歩んで行く。

時刻はこれより半日ほど遡り、場所は暗い暗い光が差し込まない地の底。

その漆国の闇の中で、何者かが眠っている。大きな体をゴツゴツとした地面の上に投げ出し、熟睡してしまっているのか、その人物は微動だにしない。

そこに、気配もなく、一人の人物が姿を現す。

「・・・全く。相変わらず、緊張感のないだらしない奴じゃ。自分から誘っておいて、妾めかけに出向かせるとは・・・」

溜息を洩らした人物は、声からして幼い少女の様に感じられる。

少女は、だらしなく地面に寝転がった人物の頭に、手にしていた杖の柄の部分当て、ゴルフのスイングの様に力一杯振り切った。

ゴンッ！

これ以上なく鈍い音が地の底に響き、寝ていた人物は、ようやく

重い瞼をゆるゆると持ち上げ、自分を叩いた人物を仰ぎ見る。

「・・・ああ、ママだったのか。何か用か・・・？」

まだ寝ぼけているのか、地面に横たわったまま、その人物は少女にめんどくさそうに話し掛ける。別に痛がる様子もなく、頭をゴルフボール代わりにされた事にも、怒りは感じてはいないらしい。低い声からして、こちらはおそらくは成人をした男性と思われる。

「何か用か、ではないぞ！この馬鹿息子。今日が何の日か忘れたのか？そちの頭には、わらが一杯詰まっておるのか？」

男の言葉を聞き、少女は呆れた様に溜息を吐き出し、今度は手にしていた杖の先で、男の額をこんこんとつつく。

「・・・？ああ、そう言えば・・・」

杖でつつかれるままにしながら、男はしばらく考えた後で、今日という日の大事な行事を思い出す。

「で、行くのか行かないのかどちらにするのじゃ？妾としては、どちらでも良いぞ」

杖で男をつつく事を止め、少女は両方の腰に軽く手をあて、男に決断を迫る。

「・・・めんどくさいが、何もしない訳にもいかないだろう・・・
・・・行く」

無気力に答えた後で、男はむくりと起き上がる。

「・・・そちは、本当に緊張感がないのう。そのような様で大丈夫なのか？相手は・・・」

「心配ない。ママ、やると決めた以上、俺はやる男だ・・・。うん、多分・・・。それに、種はもう撒き終わっていると、あいつが言っていた」

少女にというよりは、むしろ自分に言い聞かす様に、男はつぶやく。

「では、髪を解かせ。出かける前に、その寝癖を何とかせよ。妾は、そちの様ならしのない者とは、一緒に歩きたくはないぞ」

寝癖で髪の毛が乱れに乱れまくっている男に、少女はとてつもない

くいかつい鉄の櫛を手渡す。

「・・・ああ、わかった」

男は素直に少女から櫛を受け取り、絡まっている髪をとかし始める。その髪はどんな材質で出来ているのか、櫛を動かす度に、ザリザリと不気味な音が地底に響く。

「まあ、その位で良い。さっさと、行くぞ」

男の身支度がある程度整ったところで、少女は納得した様に頷き、先に何処かへと姿をくらませて行く。

「・・・目が覚めた。では、俺も行くとするか。待っているがいい、ローグル、アルグド。あの時の礼は、きっちりと返させて貰おう。お前達の可愛い子供達にな。この時を待っていたのだ。・・・時は満ちた」

さっきまでのぼんやりとした表情から、ひやりとした冷氣さえ感じさせる残忍な笑みを浮かべ、男は低く笑う。その瞳は、暗闇の中で金色に輝いていた。

そのまま、男も少女の後を追ひ、ある場所へと向かって行く。

命運を握る第3の人物

場所は変わって、人間界。

ジーナとプログノスの婚約の儀が執り行われる少し前。

人間達が治めるバルジユ・ルベア国（以後はルベア国）に、3人目の能力者が、そうとは知らずに呑気過ぎる位に暮らしていた。

その人物の名は、フォルクス・エスタシオ・ロネオス（通称はフォルクの為、以後はフォルク）。このルベア国の第1王子である。王妃である母を去年に病で亡くし、現在は父王と、幼い弟・シオンとの3人家族だ。容姿は、ライトブラウンの癖であちこちに跳ねたショートカットに、深い湖の様なブルーの大きな瞳。年齢は16歳。身長は170cmで、非常に愛らしい容姿をしている。格闘は苦手だが、頭脳は明晰。魔法に憧れ、魔法薬の研究に没頭している。他にも、趣味でムエタイやカポエラを通信教育で習っており、天然で呑気な割には、身のこなしは軽かったりする。

「あゝあ、本当にいい天気だなあ」

趣味の魔法薬の研究の合間に、フォルクは王宮の庭に散歩に出て来ていた。空は青く澄み渡り、白い雲がのんびりと流れている。暖かな日差しが降り注ぎ、柔らかな風がフォルクの頬を優しく撫でて行く。

フォルクの住まう人間界は、魔法などは一切存在しない為、魔族達が瀕している深刻な問題とは全くの無縁だ。

だが、それでもどこか2つの世界は通じているのか、人間界にも最近異変が生じ始めている。それは、ある日突然、一つの町が地盤沈下により消滅をしたり、川の水が異常な増水後氾濫を起こし、収穫間際だった畑の作物が流されてしまうなどの、結構深刻な事態にまで発展しつつある。

普段は呑気なフォルクだが、これでも一国の王子。出席をした朝議で聞かさせる報告に、少なからず心を痛めてはいる。

それに・・・。

フォルクには、口には出して上手く説明出来そうにないが、この一連の異常事態には、何か大きなまがごとが潜んでいる様な気がしてならないのだ。

自分の中でのみ、日々強くなつて行く警告音・・・。
何かが起こる。

そんな不安を払う為と、有事の際には国を救える様にと、フォルクはフォルクなりに、魔法薬の研究に勤しんでいるのだ。

「僕にも、何かが出来たらいいんだけど・・・」

空を流れる雲を見上げ、フォルクはつぶやく。

そんなフォルクを、狙う怪しい影が一つ。

その人物は、深い溜息を吐き出した後で、覚悟を決めた様に、フォルクに向いボーガンを構え、その矢を放つ。

どうやら、潜んでいた人物は、フォルクの命を狙う暗殺者だったらしい。

放たれた矢は、逸れる事無く真っ直ぐにフォルクの心臓目がけて飛んで行く。

「よいしょ！」

その瞬間、何の前触れもなく、フォルクは大きく体をひねり、呑気にストレッチを始める。

放たれた矢は、フォルクの体のすれすれを掠め、そのまま庭の奥へと虚しく空をかいて消えて行く。

「・・・ちっ！」

潜んでいた人物は、小さな声で舌打ちをし、今度は手にしていた短刀を続け様に投げる。

「よつとつとつ・・・」

その短刀達を、今度は見事なばくてんで、フォルクは難なく交わしてしまう。

その後も、フォルクに目がけて、姿を潜めた暗殺者は攻撃を繰り返すが、その全ては交わされてしまい、フォルクは相変わらずびん

ぴんしている。

言って置くが、命を狙われているフォルクには、全くその自覚がなく、攻撃も故意にかわしているのではない。むしろ、フォルクにしてみれば、ストレッチをしていたら、攻撃が勝手に逸れて行ったと言った方が正しいだろう。

「・・・」

フォルクに全く攻撃が当たらない為、暗殺者は手にしていた手留弾のピンを引き抜き、そのまま投げつける。

ゴトリ・・・。

フォルクの足元に手留弾が転がり、暗殺者は今度こそ仕留めたと笑う。

「あっ！」

その瞬間、少し離れた木の上に何かを見つけたフォルクは、人間とは到底思えない脚力で、一瞬にしてその場所まで跳躍をする。

ドガアアアンツ！

凄さまじい爆音が響き、爆風と砂ぼこりが周囲の視界を遮る。

殺ったか？

その一瞬を逃していた暗殺者は、フォルクを仕留めたと思いきみ、僅かに身を乗り出す。

しかし、その表情は、どこか後悔とやるせなさに支配されていた。

「やったあ！前から探してた茸だ。これがあれば、また新しい魔法薬が作れるよ」

木の枝の上に飛び乗っていたフォルクは、見つけ出したお宝を手にとり、うつつりとしている。研究馬鹿のフォルクは、興味のある物を見つけて出すと、周りの事は全てどうでも良くなってしまふ。その為今、自分の背後で起った爆発騒ぎにも、全く気がついていない。

フォルクが今後ろを振り返れば、周囲は結構な惨劇になっている。さっきまでフォルクがいた場所は爆弾で吹き飛び、それ以外にも、周囲の地面や木には、色々な凶器が深々と突き刺さっている。

だが、当のフォルクは、手に入れたお宝に夢中で、周囲の状況など

どうでもいい様だ。

ここまで来ると、天然なのか計算なのか分からない。

「あつちにもあるかな？探してみよう」

周囲の木々を見渡し、フォルクは身軽な猿の様に、枝から枝へと飛び移って行く。そうして、その姿は、暗殺者の目からは確認出来なくなる。

「・・・だから、何でだ？」

異常に身軽なフォルクを見送り、暗殺者はがっくりと地面に膝を着く。

今日だけでなく、この人物は、今まで幾度となく、フォルクを亡き者にしようとしてきた。

しかし、結果は何時も同じ・・・。

フォルクには何を仕掛けようとも、彼は自然に振る舞い、その全てを完璧に回避してしまう。そして、自分が狙われている事には、全く気がついていない。しかも、武術はあまり得意ではない癖に、身軽さは猿以上だ。時には、命綱なしで、城の城壁を登る事さえやっつける。

「・・・私が、何とかしないと・・・」

心のどこかでは、フォルクが無事な事に安堵をしながらも、暗殺者は焦っていた。

どうやらこの人物は、自分の意志でフォルクを亡き者にしたいようではないらしい。

しかし、思いつめた瞳を見ると、そうしなければならぬ事情が、暗殺者にはあるようだ。

「取りあえず、元通りにしておくか」

ひとしきり破壊された庭を見渡した後で、暗殺者は後片付けに取り掛かり始める。

自分で壊しておきながら、自分で片付けをする。

ここまで来れば、この暗殺者の事も良く分からなくなる。

妙に几帳面な暗殺者と、何処までも天然ボケのフォルク。

ここにも、ジーナとファイアの様な、妙な2人組がいた。

「大量、大量！」

ひとしきり、庭の木を飛び回ってきた後で、お宝達を手に、フォルクは自分の部屋へと戻って来る。そこは、色々な研究機材が所狭しと並べられ、壁際の書棚には、人間界の本だけでなく、魔族の世界の本まで並べられていた。王子の部屋というよりは、むしろ研究室と表現した方が正しそうだ。

「入りますよ」

短いノックの後で、一人の青年がフォルクの部屋へと入って来る。彼の名は、あまみや えにし天宮 縁。ルベア国から南東にある、たんせんこく丹仙国の出身で、現在はフォルクの侍従長として仕えている。家族は、両親と、病弱な双子の弟の斑まだらの4人家族。彼以外の家族は、国に残っている為、単身でルベア国に渡って来ている。その容姿は、黒に近いこげ茶の肩まで髪を自然に後ろに流し、こげ茶の何処か寂しげな瞳をしている。年齢は25歳、身長は180cmで華奢な位の細身。優しげな風貌をしており、人目を引く美形だが、その見かけとは違い、てんが天牙龍円流りゅうという、りゅう丹仙国独特の剣・たんせんとう丹仙刀（片刃の細見の剣。日本刀に類似している）を操る剣の達人だ。そして、性格は超がつく程のドSで、発言には一切の容赦がない。

「何ですか、その姿は。まるで、山から降りてきた野猿の様ですね」
フォルクの姿を見るなり、縁は開口一発、容赦なく主に冷たく言い放つ。

ちょっとした運動を済ましてきたフォルクの全身は、服のあちこちが汚れ、頭には木の葉が何枚もからまっていた。それに、フォルクは全く気づいてはいなかったが、先程の爆風に巻き込まれていた為、全身は砂ぼこりで薄汚れている。

「あはははっ。本当に、山から降りてきた猿みたいだ。縁って、上手い事言うよね」

鏡の中の自分の薄汚れた姿を見つめ、フォルクはおかしそうに声を立てて笑う。

大抵の者達は、縁の毒舌の前に怒りを露わにするか、逆にへこまされてしまうのだが、フォルクには全く通用していない。

「・・・はあ。ともかく、今直ぐ着替えて下さい。風呂も直ぐに用意をさせますので。私は、猿とは話をしたくはありませんから」
溜息を吐き出し、縁はフォルクに着替えをする様に促す。

「わかった。人間に戻って来るから、サンドイッチを作つてよ。ちよつと運動をしたら、お腹がすいちゃった」

今度も縁の皮肉をさらりと受け流し、フォルクはキラキラとした目で縁を見上げる。

「わかりました。今日は何がいいですか？」

「えつとね・・・じゃあ、カリッと焼いたベーコンと、レタスとトマトが挟まったやつがいい。ケチャップとマヨネーズは多めにしな。それと、フライドポテトとコーラもつけて欲しいな」

半ば呆れている縁に、フォルクスは無邪気に自分の要求を告げる。

「わかりました」

「やったあ！じゃあ、お風呂に行つて来る」

頷いた縁に笑いかけた後で、フォルクは入浴場へとスキップをしながら向つて行く。

「・・・全く。大物なのか馬鹿なのか、さっぱり見当がつきませんね」

そんな主の後ろ姿を見送つた後で、縁は大袈裟過ぎる位に肩をすくめ、そのままフォルクのサンドイッチを作る為に、厨房へと足を向けて行く。

王宮の大きな浴場で素早く入浴を済ませ、フォルクは自室の研究室へと戻る。まだ縁が来ていなかった為、先程探つて来ていたお宝の分別へと取り掛かる。

「お待たせしました」

しばらくそうしていると、フォルクの注文の品を盆に乗せた縁が、

何時の間にか背後に立っていた。

「わあ、おいしそう。ねえ、もう食べてもいい？」

今は綺麗になった自分の全身を縁に示し、フォルクは無邪気に笑う。

「いいですよ。どうやら、人間に戻った様ですから」

フォルクの全身を観察した後で、縁は主の前にサンドイッチとコーラを置く。

「やったあ！頂きます」

お宝から、今度はサンドイッチへと興味の対象を移し、フォルクは美味しそうにかぶりつく。

「フォルク様、一つ聞いてもいいですか？」

「何？」

自分に話しかけて来た縁には視線を全く向けず、フォルクは問い返す。

「どうして、魔法に興味をもたれるんですか？それに、魔族の本ままでこんなに集められて」

フォルクの本棚に一杯に詰められた魔界の本と、ごちゃごちゃとした彼の研究室を見渡し、縁が尋ねる。

「・・・うん。そう言われると、どうしてだろう？何でかな、懐かしい様な気がするんだよね。魔法の事を考えていたり、魔法薬を研究していると、自分の中のもやもやしたものが落ち着いていくんだ。変だよ、僕は人間で、魔界なんて見た事も触れりゃ事もないのに。それに、見た事もない筈の文字なのに、僕には魔族の文字が読めちゃうんだ」

縁の問いかけに、フォルクは、自分が魔法に憧れる理由を真剣に考えてみる。

人間の自分には、魔法など一生無縁のものだろう。現に、フォルクの住む人間界は、文明が発達し、色々な便利な道具が日々誕生して行っている。それは、魔法以上のものかも知れない。

しかし、物心ついた頃より、フォルクの中には、常に不安が植え

つけられている。

ここは、自分の本当の世界ではない。

早く、帰らなければ。

自分の帰りを待っている。

それは、一体誰が？

そういう焦りの様な想いと、考えても答えの出ない問いかけが、一見能天気には見えないフォルクの中から、この16年間消えた事は1日たりともなかった。いや、もしかしたら苦悩を紛らわす為に、馬鹿にも見える様な脳天気演じているのかも知れない。

現に、今、この瞬間でさえ、胸の中でざわめき続ける想い。

いや、今日はその想いが、何時もよりも更に強い。

「……！」

考え事をしていたフォルクの体が、一瞬激しく痙攣する。

フォルクの中で、何者かが彼に呼び掛けて来る。

危機が迫って来ている。戻って来い……と。

「フォルク様？」

何時もとは違うフォルクの様子を訝しり、縁はその顔を覗きこむ。

「……行かなくちゃ」

座っていた椅子から立ち上がり、フォルクはぼんやりとつぶやく。その顔からは、全く感情が欠落している。

「……呼んでる。僕の半身が、僕に助けを求めている」

相変わらず何も映していない虚ろな瞳で、フォルクは何もない空中に手をかざす。

途端に、部屋の中に激しい気流が巻き起こり、元より物が散乱したフォルクの部屋は、タイフーンの直撃を受けた様な騒ぎに陥る。

「……！」

巻き起こる風の中で、うつすらと目を開いた縁が見たのは、ライトブラウンのショートカットが、真紅の長髪へと変化して行くフォルクの姿だった。それに伴い、何時もは呑気そうに大きく開かれていた瞳が、鋭い光を帯びて行く。

「・・・駄目です！『そつち』に行つては！」

フォルクの容姿の変化には全く驚かず、縁は別の何かから彼を引きとめる様に、その腕を捕まえる。

その瞳は真剣で、フォルクの知らない何かを、縁が知っている事は確かだった。

「大丈夫、心配はいらない」

何時もとは違う落ち着いた声音で、フォルクは縁に話しかける。

「では、私も連れて行つて下さい」

「縁は、何をそんなに怯えているの？何時もの『僕』は気がつかなくつたけど、今の『僕』なら君の心の悲鳴が聞こえる」

「・・・それは」

じつと静かな瞳でフォルクに見つめられ、縁は言い淀む。

「・・・時間がない。跳ぶよ・・・」

縁からの返答を聞く前に、何かを感じとっていたフォルクは、急ぎ何処かへと通じる路を開き、その中へと飛び込んで行く。

縁は、その腕を離さない様に掴み、一緒について行く。

フォルクと縁の姿が消えた後で、部屋は静寂を取り戻す。

この瞬間、人間界から2人の存在は消え去っていた。

招かれざる来訪者

場所と時間は再び戻って、マティス国の大聖堂。

マティス国の女王と国王、デルタ国の国王と王妃の前に、中央の赤い絨毯の上をゆっくりと歩いて来たジーナとプログノスが並ぶ。そんな2人を、マティス国・デルタ国の両国の王候貴族達は、うつとりとした眼差しで見守る。人形のように愛らしいジーナと、絵から抜け出した様な美貌のプログノスは、ただそこに並んで立っているだけで、見る者全てを魅了していた。

ただ一人、紳士の仮面の下で、乙女心の嫉妬に狂うディールを除いて。

ジーナとプログノスが祭壇の前に進んだ所で、婚約の儀が執り行われる。両国の中で一番権威のある神官が、太古の昔から言い伝えられてきた、ドラグーンという言葉を厳かに読み上げる。実際には、あまりに古すぎる言葉なので、ジーナは勿論、この場にいる者全てにその意味はさっぱり分かってはいない。確かな事は、とにかくありがたいという事だけだった。

儀式はゆったりと進行し、最初に両国の女王と国王が、それぞれの調印書に署名を済ます。これにより、国同士の取り決めが成立し、先ずは2つの国が1つに統合された事となる。

「両国の王の承認により、北を統べるローグラウ・マティス国と、南を統べるアルグライザ・デルタ国の、統合が今ここに成立した事を宣言致します。続いて、ローグラウ・マティス国の第1皇女・クラベジーナ、ベルジュア、ノーヴェンと、アルグライ・デルタ国の第1皇子・プログノス、バラウセア、インビエルノの婚約の儀に移ります。偉大なるドラグーンの御前にて、異議なき者は沈黙を守りなさい。異議のある者は、この場で名乗り出なさい」

続いて、神官が参列者一同を見渡し、異議の有無を問いかけるが、

こんな時に嫌という馬鹿はまずはいない。参列者達は、皆俯き、沈黙を守る。

こんな婚約、誰が認めるものですかっ！

嫉妬に狂ったディールは、普段の最大の猫かぶりを捨て、思わず名乗りをあげようとする。

ぞくり……。その背に冷気（殺意）が吹きつけられてきたため、ディールが恐る恐る振り返ると、背後には笑みを湛えたフィアが、いつの間にか立っていた。一見、その顔は、美しい華の様に微笑んでいる。

しかし、その真意は。

邪魔をすれば……。

そういう、フィアの無言の圧力が、鞭なしでディールを一瞬にして縛り上げた。

「殊勝な心がけ、恐れいります。流石は、マティス国一の優雅な紳士・ディオルス＝ベルクローゼン卿ですわ」

ディールの耳元で、フィアは妖艶に微笑み、留めを刺す事を忘れない。その言葉は丁寧ながら、最大級の皮肉が込められていた。

「……」

ディールはフィアの前に敗北し、彼女の監視の元に、婚約の儀を大人しく見守る事となる。

「異議のある者はおりませんな。では、お2人共、こちらの誓約書に署名をなさってください」

しばしの沈黙の後で、ジーナとプログノスの前に婚約の誓約書を差し出し、神官は署名を促す。ジーナとプログノスの手には、それぞれ特殊な魔法が掛けられた、羽ペンが手渡される。これで誓った事は、2度と取り消す事が出来ないという、神聖な儀式に用いられる道具である。ちなみに使用されるインクは、誓約交わす本人達の血である。

「どうやら、無事に終わりそうですね。ドラグーンはお見えになっておられないようですが、きっと、私達の事を見守って下さっている

事でしょう」

羽ペンを受け取り、プログノスは隣のジーナに安堵した様に話し掛ける。

いや、実際は、自分自身が数日前から抱いていた、言い様のない不安に言い聞かせていたのかも知れない。

「はい」

消え入りそうな声で答え、ジーナは淑やかに微笑む。

ジーナは、静かに大聖堂の中を見渡す。

確かに、ここにはドラグーン達の姿は見当たらない様だ。

ジーナには、幻惑を看破する能力が授かっている。その為、いかに魔法で姿を変えようと、ジーナの瞳には変化の前の姿が映るの
で、誤魔化す事は出来ない。

良かった、無事に終わりそう・・・。

この後に控えている盛大な晩餐会（馬鹿騒ぎ）にはうんざりする
が、取りあえずは儀式の終了が見え、ジーナは胸の中で安堵する。

「・・・？」

その時、ジーナの瞳の端に、一瞬何かが映る。

マテイス国の群衆の中に、黒いオーラの様なものが立ち昇り、瞬間的にかき消えたのだ。

その姿は、一人の青年の様に感じられたのだが、あまりに一瞬の
事だったので、ジーナには確証を得る事が出来なかった。

・・・？何なの、今は・・・？

途端にジーナの胸が、不安で掻き毟られる。背中には冷汗が伝い、
全身には鳥肌が立っていた。

「ジーナ殿？」

隣に立っていたプログノスが、どこか落ち着きのないジーナの様
子を訝しり、話し掛けて来る。

「・・・いえ、何でもございませんわ」

プログノスに微笑みかけ、ジーナは今見た物を、自分の気のせい
だと片付けようとする。

そして、羽ペンの尖ったペン先で自分の指を突き、血を吸いこませる。

プログノスも指先を突き、2人が顔を見合せて署名をしようとした時、邪魔が入った。

「その婚約、妾は認めぬ」

少女の声が響き、ジーナとプログノスの手は、誓約書の寸前で止まる。

大聖堂はどよめき、皆が声の主を探すが、その姿は何処にも見つける事が出来ない。

「・・・ちが、違うわ！私じゃないわよ！」

デイルは慌てて、自分の背後にいるフィアに、自分の身の潔白を訴える。

「それ位、わかっております！」

声の主は、フィアは直感的にただならぬものを感じとり、ドレスの中に忍ばせてあった鞭に手を伸ばす。

「・・・誰だ？おいで、光の妖精・レナリス。」

デルタ国の群衆の中にいたルクサリオも、異常事態に緊張を走らせ、素早く光の妖精・レナリスを召還する。

【は〜い？】

【ルクちゃん、呼んだ？】

【かわいい〜？会いたかった？】

呑気な幼い少女達の声が木霊し、体長が15cm程の妖精達が姿を現す。その姿は、金の柔らかなパーマの掛った腰までの髪に、大きな空色の瞳。足首までがすっぽりと覆われる白のドレスを身にまとい、背中に生やした蝶々に似た羽で、ひらひらとルクサリオの周りを舞っている。

その直後、大聖堂の中は、一寸先も見ることが叶わない、漆黒の闇に覆われた。暗闇の中に、参列者達のざわめきと、衣擦れの音が響

く。皆、突然の出来事に混乱し、視界を奪われ、その場から動く事が出来ずにいる様だ。

「この非常事態ゆえ、御身に許しなく触れる無礼をお許し願いたい。・・・ジーナ殿。どうか、私の側を離れられぬ様に・・・」

隣のジーナを自分の側に引き寄せ、プログノスは周囲に気配を凝らす。

闇の中より、数日前に感じた、あの殺意にも似た血潮の様な生臭い悪意が、ジーナとプログノスを容赦なく襲う。

やはり、不吉の前触れだったか・・・。

自分の予知が現実となった事に、プログノスは歯噛みしたい衝動に駆られる。

「・・・」

一方のジーナは、表向きはプログノスの影で震える淑やかな皇女を演じながら、自分達を闇から見据える相手を探し、何時でも攻撃を繰り出せるよう、拳に意識を集中していた。この暗闇なら、多少派手に暴れようが、誰の目も気にする必要はないだろう。それに、普段から鍛錬を積んでいるジーナには、光があろうが無かるうが、そんな事は大した事ではない。要は、平常心さえ失わなければ、相手が何処から攻めて来ようとも、直ぐに対応が出来る筈だ。

「・・・ぎゃっ！」

突如、ジーナとプログノスの直ぐ近くの暗闇の中で、何者かが叫び、床の上に倒れ込む音が響く。声からして、神官に違いない。

「・・・ふん。こんな誓約書、俺の前では何の役にも立たん。こっちが国の統合で、こっちが婚約か」

低い残忍な男の声が響き、次に、誓約書が燃やされる。

一瞬の炎の中に照らし出されたのは、濃い紫色の髪と、金の冷淡な目をした、2mを超える長身の男の姿。耳は細く長く尖っており、体に刻まれた独特の文様から、魔族以外の種族である事は一目瞭然だった。

本来なら、何があっても破棄する事の出来ない誓約書が、いとも

簡単に炭屑にされた事を考えると、目の前のこの人物の実力は、ドラグーンを超えるか、それと並ぶ者である事は想像に容易い。

「来い、時の妖獣・ロードグラン！」

相手の実力を、瞬時に感じとったプログノスは、素早く時の妖獣・ロードグランを召還する。

【我が主よ、我を呼んだか？】

次の瞬間、プログノスの側に、全身が真っ白な綺麗な毛におおわれた、頭が驚、体がライオン、背中に大きな2枚の羽を生やした場合^キ成獣^{メラ}が姿を現し、召還主^{マスター}のプログノスに低い男の声で話しかける。体長は後ろ足で立ち上がると、プログノスを優に超える大きさだ。

このロードグランは、プログノスが魔法をより強化させる為、姿を具現化させたものである。

先程、ルクサリオが召還したレナリスも、魔法が具現化した姿だ。仮に、同じ魔法を発動させたとしても、その姿は召還主によって大きく異なる。ただ、共通している事は、彼等は召還主の命には背く事がなく、人語を理解し、自らの意志で行動するという事だ。

補足しておくくと、一定レベルの実力に達していない者には、魔法に姿や意思を持たせる事は出来ない。これは、超難関で高度な魔法技術である。

「ロードグラン。私がいいと言うまで、私達以外の者達の時間を縛れ！」

プログノスは、短い言葉でロードグランに命じる。

【一切、承知】

ロードグランは、プログノスの短い言葉で主の考えを全て読み取り、不敵に唇の端を吊り上げにやりの笑い、目にも止まらぬ速さで闇の中を縦横無尽に駆け出す。

ロードグランに触れられた者達は、そのまま動きを止める。

やがて、ロードグランは、自分の通った道筋で魔法陣を造り上げ、起爆地点を前足で力一杯踏みつける。

その瞬間、マティス国・デルタ国の参列者達の時間と身体は、口

ードグランによって凍結させられた。こうしておくで、彼等に危害が加えられる事がない。時が止められた者達は、魂と体を凍てつかされ、その姿は幻となる。従って、傷を負う事も、命を奪われる心配もなくなるという訳だ。

魔法陣を発動させたロードグランは、その起爆地点からは動かず、ただプログノスの意思に従う。

「・・・ほう。中々にやるではないか。これだけの人数の時を、一瞬にして凍らせるとは。しかも、魔法に姿と意思を与える事が出来るとは。思っていたよりは、楽しませて貰えそうじゃな」

先程の少女が、男の横に姿を現し、暗闇の中で、プログノスとロードグランを興味深そうに眺め、ニツと笑う。

「プログノス様、ジーナ様！レナ（レナリスの愛称）を送ります。どうか、目としてお使い下さい！」

暗闇の中から、ルクサリオの声が響く。

【ルクちゃん、任せておいて？お邪魔しま〜す】

元気な女の子の声が響き、その直後、ジーナとプログノスの体の中にレナリス達が飛び込んで行き、彼等の目は暗闇の中も昼同様に見渡せる様になる。

先程、ルクサリオが召還したレナリスは、暗闇を照らす以外にも、体の中に取り込めば、闇の中でも『目』として使役する事が出来るのだ。

ちなみに、ルクサリオが今も動く事が出来ているのは、プログノスの考えを先読みし、シールドを張り、魔法を跳ね返していたからだ。ルクサリオは、自分にシールドを張ると同時に、ファイアにも同じ物を張った。

ルクサリオ同様、異常を感じとっていたファイアは、自分にシールドが張られた事を感じた瞬間、自分の直ぐ前にいたディールの体を素早く引き寄せ、プログノスの魔法から身を守っていた。

つまり、今、この場で動いているのは、ジーナとプログノス、それにルクサリオとファイアとディール。それに、長身の男と少女の7

人だけという事になる。

「こんな時に、他人の心配とは大した余裕だな。流石は、ローグルとアルグドの血を継いだ者達だ。自分達の命が消えようという時に泣かせる話だな」

男は、半分は感心した様に、そして半分は馬鹿にした様に、プログノスをじつと見据える。

「お前は、何者だ？」

「・・・はっ。相手に名を尋ねる時は、自分が先に名乗るものだろうが。だが、いいだろう。今日の俺は機嫌がいい。特別に教えてやる。俺の名前は、ヴァゼンシグド。貴様等の先祖の産みの親の古い古い友人と言ったところか？」

プログノスを見下ろし、不快そうに鼻を鳴らした後で、ヴァゼンシグドは自分の名を名乗る。

はつきりとした視界でヴァゼンシグドの姿を観察すると、やはり、魔族ではないらしい。その容姿は、長さがちぐはぐの好きな方向に向いた濃い紫の髪に、金の冷淡な瞳。身長は208cmもあり、体は逞しい筋肉が盛り上がり、かなり大柄な人物。年齢は不明だが、見た目は20歳半ばといったところか。その体は、光沢を帯びた固い鱗に一面覆われている。

「・・・ドラグーン様の？」

今まで黙っていたジーナが、怖そうな演技で口を開く。

ドラグーンの友人という事は、目の前のヴァゼンシグドも神竜という事になるのではないか？

しかし、ヴァゼンシグドという名は一度も耳にした事がないし、仮に神竜ならば、何故、自分達を狙って来るのだろうか？

「なんじゃ。そちは、弱そうな娘じゃな。妾の名は、ラニア。覚えておく必要はないぞ。何故なら、そなたらは今から死ぬ身であるからな」

ジーナの全身をじろじろと観察し、ラニアはおかしそうに笑う。

ラニアの容姿は、ラベンダー色のポリウムのある髪を、耳の両

横とポニーテールの三つで結び分け、どこか気高さを感じさせるロイヤルブルーの瞳をしている。身長は130cmと低く、見た目は10歳位の愛らしい少女。しかし、口調は大人びており、本人が無意識に周囲に与えるプレッシャーは、彼女も唯者でない事を示している。

「ヴァゼンシグドよ、妾はこの男の方を貰うぞ。こんなか弱い娘を貰ったとて、満足に楽しむ事も出来ぬ」

ヴァゼンシグドを見上げ、ラニアが話しかける。

「俺は、別にどっちでもいい。ママが男の方がいいのなら、俺は娘でいい」

特に異論はないらしく、ヴァゼンシグドは、ラニアに素直に頷く。先程から観察していていると、ヴァゼンシグドよりもラニアの方が、立場は上の様だ。

「決まりじゃ。では、参る！」

笑うと同時に、ラニアは魔法で燃え盛る炎の壁を、何のアクションも見せないまま、ジーナとプログノスの周囲に召喚する。一瞬後、漆黒の闇が、不気味な赤色に塗り替えられる。

「プログノス様！」

「ジーナ様！」

離れた場所から見守っていた、ルクサリオとフィアが、それぞれの主を気遣い、その名を呼ぶ。離れた場所にいる彼等にも、凄まじい熱気が容赦なく吹き付けて来る。

「無駄だ。ママの魔法の召喚速度には、誰も勝つ事が出来ない。貴様達の主は、何が起こったか理解も出来ぬまま、哀れな炭屑と化した。随分と、呆気ない最期だ。いくら、か弱い魔族とはいえ、ローグルとアルグドの血を受け継ぐ者達。もう少し位は、まともな抵抗をしてくれると思っていたのだが・・・」

フィアとルクサリオに冷たく言い放ち、ヴァゼンシグドはつまらなそうにしている。

「・・・いや、そうでもなさそうじゃ」

そんなヴァゼンシグドを仰ぎ見、ラニアは嬉しそうに笑う。

「随分と、物騒な輩の様だ。いきなり、人をウェルダンのステーキにしようとは……」

炎を引いた後には、涼しい顔のプログノスと、彼に護られる様にして、その背後にジーナが立っていた。2人共無傷で、衣装に焦げた跡もない。

「素敵？」

プログノスの雄姿に、護られているジーナを自分に置き換え、ディールは頬を赤らめ、場違いな溜息を洩らす。

場面は緊迫している為、今は、誰もそんなディールには気を止めてもいない。

「……ほう」

ヴァゼンシグドが、感心した様に目を細める。

未来を見通す能力を持つプログノスは、ラニアが炎の壁を召還する事を先読みし、それよりも早く、幾重にも水と氷の壁を張り巡らせ、自分達の体を耐熱ガラスの様な膜で覆っておいたのだ。その為、炎の熱と威力から身を守る事が出来た。

プログノスが、魔法の腕とスピードが魔界一と言われる由来は、この能力から来ている。

「凄……！」

プログノスの魔法の腕前に、ジーナはただ感心していた。

それと同時に、自分も暴れたくてうずうずして来る。護られているのなど、自分の趣味には合わない。

「思っていたよりも、ずっと楽しめそうだ。次は、俺だ！」

言葉が終わる前に、ヴァゼンシグドはジーナとプログノスとの距離を詰め、足を大きく振り上げ、かかと落としを繰り出してくる。

「……！」

魔法は得意なプログノスだが、素早すぎるヴァゼンシグドの動きにはついて行けず、一瞬遅れを取る。

「……あっ！」

そんなプログノスの体を、あくまで自分がよるめいた素振りでき飛ばし、ジーナはヴァゼンシグドの攻撃を難なく交わす。

「フィア、お願い！」

そして、フィアに向い、目くらましの空間を作るよう、合図を送る。

誰の目も気にせず、自由に暴れまわる事が出来る様にと。

「かしこまりました」

フィアは直ぐに頷き、ジーナとヴァゼンシグドの体を、目くらましの空間へと閉じ込めてしまう。

「ジーナ殿！」

ジーナとヴァゼンシグドの姿が消えた事に驚き、プログノスはその後を追おうとするが、ラニアがそれを許さない。

「何処行く？そちの相手は、この妾ぞ。油断をしておれば、今度こそ、その麗しい容姿を、二目と見れぬ姿にしてやるっぞ」

プログノスの行く手を遮り、ラニアが不敵に笑う。

「女子供を、相手にするのは気が進まないが、致し方ない。悪いお嬢さんには、お痛が出来ない様にお仕置きをしておかないといけない様だ・・・」

ラニア相手に、手を抜く事は一切出来ない為、プログノスは目の前の相手に集中する事にする。

「言って置くが、妾は、そちよりもずっと年上ぞ。可愛がってやるっ、かかってくるがいい、坊や」

「私は、坊やではありません。言い忘れていましたが、私の名はプログノス。デルタ国の第1皇子です。呼ぶのなら、きちんと名前で呼んで頂きたい、ラニア殿」

見た目は、自分よりも遥かに子供のラニアに坊や扱いをされ、プログノスは気分を害す。

「生意気な。デルタ国と言えば、アルグドの血脈か。確かに、その品の良さはかの者に良く似ておる。いいだろう。では、プログノスよ、何処からでもかかってくるが良いぞ」

プログノスを見上げ、ラニアは鼻を鳴らし、彼を挑発する。
その後、プログノスとラニアは、互いの隙を窺い、しばらくは無
言で睨み合う。

ジーナ VS ヴァゼンシグド

一方、こちらは目くらましの空間に閉じ込められた、ジーナとヴァゼンシグド。

「さっきは、ドレスの裾にでもまくれてかわせたか？だが、まくれは2度は訪れない。貴様を護ってくれる皇子様^{ナイト}は、ここにはいないぞ。魔法を失敗した、お前の従者を恨むのだな」

未だ、ジーナが弱いと思っっているヴァゼンシグドは、ファイアがかけた魔法は失敗だと決めつけ、自分に背中を向けているジーナに冷たく言い放つ。

「・・・これで、気がねをする必要もない。誰の目も気にならない。あんたを叩きのめしてもいいって事よね」

淑女の仮面（猫）を脱ぎ棄て、本来の自分に戻り、ジーナが楽しみにヴァゼンシグドを振り返る。その口元には、楽しげな笑みが浮かべられていた。

「・・・？」

ジーナの豹変ぶりに、ヴァゼンシグドは不思議そうに首を傾げる。「何よ？その間抜けな顔は！私が、まくれであんたの攻撃をかわした訳ないでしょ？プログノス様みたいに上手くは魔法は使えないけど、私には拳がある。かかってきなさいよ！ヴァゼンシグドだっけ？あんたも、どっちかって言うと、こっちのタイプなんでしょ？」

ヴァゼンシグドに拳を突き出し、ジーナは不敵に微笑む。

「ふはははははははははは。事前の調べでは、漆黒の淑女と聞いていたから、何も出来ない大人しい娘だと思っていたぞ。成程、それが貴様の本性という訳か」

今のジーナが、本当の彼女の姿だと理解をし、ヴァゼンシグドはおかしそうに笑う。

「その名前、次に口にしたら殺す。コルセットやパニエと一緒に、

私は大嫌いなだよ。あんたの事も嫌いだけど」

ヴァゼンシグドの口から、自分の嫌う通り名を聞き、ジーナは嫌そうに顔をしかめ、そのまま殴りかかって行く。

「おっと！中々に良い筋をしている。娘、名は何という？」

ジーナの鋭い突きをかわし、その背後に素早く回り込んだ後で、ヴァゼンシグドはジーナの耳元で囁く。

「マティス国の第1皇女、クラベジーナよ！」

素早くヴァゼンシグドから距離をとり、ジーナは自分の名を名乗る。

「マティス国と言えば、ローグルの血縁者か。成程、その血の気の多さも口の悪さも、あいつに良く似ている」

ジーナを見つめ、おかしそうに笑った後で、ヴァゼンシグドは連打を繰り返して来る。

ジーナは、両腕に魔力を集中し、ヴァゼンシグドの突きを全てなぎ払う。そうでもしないと、肌に触れられるだけで、相手の魔力で体が弾き飛ばされてしまいそうになる。

「・・・あんた、一体何者なの？ドラグーンのローグル様や、アルグド様の事をよく知ってるみたいなおぶりだし。それに、私達に、一体何の恨みがあるというの？」

今度は、ヴァゼンシグドに渾身の一撃を叩き込みながら、ジーナは相手の真意を問いかける。

正直、マティス国とデルタ国の統合を破棄され、一方的に命を狙われ、ジーナは頭に来ていた。

「あいつ等との事は、貴様に答える必要はない。だが、貴様達を殺せば、この世界は再びの混乱へと陥る。俺はこの目で見たいのだ。恐怖と絶望に支配された、救いのない世界を。光に溢れたこの薄気味悪い世界を、純粋な殺戮と闇の世界へと塗変えてやるのだ。貴様等には、直接の恨みはないが、産みの親には大きな借りがあった。恨むのなら、自分の中に流れる、その呪われた血脈を恨む事だ！」

ジーナの渾身の突きを、わざと自分の腹に受け、至近距離からジ

「ジーナの顔を覗き込み、ヴァゼンシグドはニヤニヤと笑っている。

「薄気味悪いのは、あんたの方よ。悪趣味なその思想、聞いてるだけで虫唾が走る！」

ヴァゼンシグドに見据えられ、ジーナの背に寒気が走る。

手ごたえは確かにあつた。

現に、自分の攻撃は、ヴァゼンシグドに見事にヒットしている。

しかし、目の前のヴァゼンシグドは、ジーナの攻撃を正面から受けても、平気な顔で笑っている。体には、傷一つついてはいない。

一体、どういう事なのだろうか？

「どうして、傷がつかないのか不思議に思っているのか？」

ジーナの目をじっと見つめ、ヴァゼンシグドがその心の内を読む。

「……」

その言葉には答えず、ジーナはヴァゼンシグドから離れ、近くの床の上を、彼女にしてはごくごく控えめな力で軽く小突く。

ドガツ！大理石で造られた床に敷き詰められた石は、哀れにも粉々に砕け、半径1mは軽くえぐられる。

「……やっぱり、私の力が弱い訳じゃない」

自分の拳の威力を確認し、ジーナは目の前のヴァゼンシグドを睨む。

では何故、ヴァゼンシグドには、自分の攻撃は通用しないのか？

「心配をしなくても、貴様の拳は、中々に大したものだ。普通ならば一撃を受けただけで、内臓破裂は免れないだろう。いや、全身がバラバラにされているか？だが、俺は少し特殊なのだ。それにしても、不思議だな。そんな細い体の何処に、その破壊力が宿っているのか？」

ジーナの華奢な全身を見つめ、ヴァゼンシグドは不思議そうに首を傾げる。

「この細い腰など、力を少し込めるだけで、簡単に砕けてしまいうに見えるが……」

目の前のヴァゼンシグドが姿をくらし、驚いていたジーナの背

後から、低い声が響いて来る。

「・・・！」

その声に驚き、ジーナが振り返ると同時に、ヴァゼンシグドは両腕を伸ばし、ジーナの細いウエスト部分を掴み、そのまま軽々と空中に持ち上げる。ヴァゼンシグドの大きな両手の中に、ジーナの細いウエストはすっぽりと収まり込む。

「・・・っ！」

ジーナは、何かを叫ぼうとするが、ヴァゼンシグドの両手の締め付けがきつく、呼吸を満足にする事も出来ない。逃れようにも、自分分は不安定な空中に持ち上げられている為、力を込める事も出来ない。

側から見れば、父親が子供をあやす為に、高い高いをしている様にも見えるが、今のこの2人の間には、そんな和やかな雰囲気など、到底存在してはいない。

「そろそろ、めんどくさくなってきた。男の方はママが始末をしているだろうから、貴様の事もこのままくびき殺す事にしよう」

ヴァゼンシグドは、そのまま両手に力を込め、ジーナの腰の骨をへし折ろうとする。

「・・・っ！」

ヴァゼンシグドの締め付けが更にきつくなった事により、ジーナは痛みで顔をしかめる。そして、そのまま意識も徐々に遠のいて行く。

・・・助けて！

そんなジーナの耳に、何者かの救いを求める声が響く。

それは、目の前のヴァゼンシグドの中から響いて来た様に、ジーナには感じられた。

苦し紛れというか、ドラグーンから受け継いだ能力というか、ジーナはヴァゼンシグドの喉元に埋め込まれた宝石に秘密がある様な

気がして、魔力を込めた手を伸ばす。

バチツ！という音が響き、両者の間に激しい火花が散る。

その瞬間、ジーナの脳裏に浮かんで来たのは、救いを求める自分が住まう惑星の姿と、本来ではその場所にはなくてはならない物を、ヴァゼンシグドが抜き去る光景。

それが持ち去られた事により、魔力が定まらなくなったのだと、惑星はジーナの心に直接訴えかけて来る。

「……おのれっ！」

ジーナを床の上に叩きつけ、ヴァゼンシグドは自分の喉元を覆う。

「……くっ！」

受け身のとれないまま、ジーナは床の上に体をしこたま叩きつけられ、しばらくは動く事も出来ずそのままうずくまる。

「……よくも……」

顔を怒りで引きつらせ、ヴァゼンシグドはジーナの体に目掛けて大きな足を振り下ろしてくる。

「……ここよ！貰ったわ！」

ヴァゼンシグドを睨み上げ、痛みを必死に堪え、ジーナは素早く地面に残っていた方の足を引っかける。

「……ぐっ！」

咄嗟の事で反応が遅れ、ヴァゼンシグドは、背中から派手に転ぶ。「はああっ！」

ヴァゼンシグドの上に馬乗りになり、ジーナは拳に最大限の攻撃力アップの魔法をかけ、ヴァゼンシグドの喉元に拳を振り下ろす。

「ぐああああっ！」

喉の宝石を思いつきり叩かれ、初めて、ヴァゼンシグドは苦しそうな悲鳴を上げた。

ピシリ……。聞こえるかどうかの小さな音の後で、宝石に亀裂が入る。

「勝手にレディの体に触った罰よ！コルセットだけでもきついつつのに、更に締め付けるなんてっ！」

かなり場違いではあるが、ウエストを締め付けられた事に怒りを感じているジーナは、続け様に拳をヴァゼンシグドの腹部に叩きこむ。

「がっ！」

先程までとは違い、ジーナの拳は、今度はヴァゼンシグドの体を確実にとらえていた。肉の上から骨にまで到達する低い嫌な音が、周囲に木霊する。

ジーナは、更にヴァゼンシグドに対し拳を振りおろそうとするが、嫌な感覚に襲われ、そのまま後ろに大きく飛びのく。

「・・・よくも。たかだか、脆弱な魔族の分際で・・・」

床の上から体を起こし、ヴァゼンシグドはジーナを正面から睨む。その全身からは、どす黒いオーラが立ち昇り立ち昇り始める。

「ジーナ様！」

そこに、フィアとディールが、ジーナを追いかけ、遅れて姿を現す。

「きゃあっ！・・・何なの、あのいかつい化け物は。見た目はまあまあなのに、美学の欠片もないじゃないおよお！はつきり言っつて、ナンセンスですよ！」

初めて、はつきりとヴァゼンシグドの姿を目にしたディールが悲鳴を上げ、気味悪そうに眉をひそめる。

「この際、叔父様の趣味はともかくとして。私も正体まではわからないけど、ヴァゼンシグドって名前らしいわ。後は、この世界を壊して、闇の中で引きこもりたいんだって。最大級の根暗の引きこもりよ。それで、今は私とプログノス様を殺そうとしてるみたい」

ジーナは、ディールの意見を半分以上スルーし、ヴァゼンシグドの事を、簡単にフィアとディールに説明する。

「確かに、陰険で暗そうなタイプですね。あの喉元の宝石。何かの封印でしょうか？」

ジーナにひびを入れられたヴァゼンシグドの宝石を指差し、フィアがディールに尋ねる。

「どれどれ……。ああ、そうみたいね。あの宝石で、自分の魔力をコントロールしていたのよ。私の経験によると、異なった人格と魔力を融合させる為に、ああいう事をする人種がたまにいるからね」
フィアの指差した宝石を鑑定し、ディールは自分の見解を話す。

ディールが推理をした通り、ヴァゼンシグドの喉元に埋められた宝石は、彼とある力を繋ぐ役割をすると共に、異なった2つの人格をまとめる役割を果たしていた。

ヴァゼンシグドには、2つの人格が存在する。一つ目は、破壊を好む冷酷無比な人格で、こちらは計算高くこすずるい。つまりは、今、体を使っている人格である。しかし、常にこの人格が行動し続けると、体力と魔力を激しく消耗してしまう為、ここぞという時以外は、無気力でやる気のない人格が、体の主導権を握り、魔力と体力を温存しているのだ。

それと宝石は、常に魔力で薄くて丈夫な鎧を造り出し、自分の全身を覆う役割も担っていた。その為、先程までのジーナの攻撃は、ことごとく通用しなかったのだ。だが、今はその鎧にひびが入り、肉体はダメージを受ける様になってしまっている。

「やはり、そうですね。そうなれば、あの様な宝石の力を借りずとも、異なった人格を見事に使い分けるジーナ様とディール様は、あの意味、ヴァゼンシグド以上という事になるのでしょうかね」

異なった人格を完全に使い分けるジーナとディールを、感心した様に見つめ、フィアは場違いなつばやきを漏らす。

「……。何よ！」

ジーナは、フィアをぎろりと睨む。

「んまあ、失礼しちゃうわね。それを言うのなら、完璧な精神力と演技力だと訂正して欲しいわ。少なくとも、あんな物の助けを借り

なくてはならない、不安定な輩とは出来が違うんだから！」

デイルも頬を膨らまし、ファイアに抗議をする。

「いえ、あくまでお褒めしているだけに過ぎませんので。お2人は、素晴らしい才能（猫かぶり）の持ち主ですよ」

「本当かしら？ヴァゼンシグドよりも、今のファイアの言葉の方に、とてつもない悪意を感じたわ」

涼しい顔で微笑むファイアを、ジーナは軽く睨む。

「うがあああああっ！」

自分の中の何かを抑える事が出来なくなっただのか、ヴァゼンシグドは大きく身をよじり、頭を押さえこむ。

それと同時に、先程以上の強烈で禍々しい魔力が溢れ出し、ファイアの造り出した目くらましの空間の中一杯に充満して行く。

それは、一種の有害な障気にも似ていて、呼吸をする度にジーナ達の体内に侵入し、その自由を奪って行くようだ。

「・・・こほこほっ。ちよっと、このままじゃやばいわよ。どうするの、って言うか、あんたは何をしたの？見たところ、凄く怒っちゃってるじゃないのよお！」

ヴァゼンシグドの強烈な魔力に咳込み、デイルは悲鳴を上げ、ジーナに話し掛ける。

「別に、何て事はしてないわよ。ただちよっと、あいつをほこ殴りにして、宝石を崩し、腹に一撃をお見舞いしたに過ぎないわ。でも、あの宝石を壊せたお陰で、今までは何をしても効かなかった攻撃が、今ははつきりと通用する様になった。で、提案なんだけど、ファイアが鞭と魔法であいつの自由を縛って、私と叔父様が、ヴァゼンシグドを2人でタコ殴りってのはどうかしら？」

自分が、ファイア達が来る前にヴァゼンシグドにした事を、これまた簡単に話し、ジーナは2人に提案を持ちかける。

「ジーナ様らしい、実に野蛮かつ無謀極まりない策ですね。簡単に言うてはくれますが、あんな危険な相手、縛るのも命がけですよ。・・・とは言え、今は、それが1番有効そうですね。このまま、この

悪趣味な魔力を吸わされ続けるつもりもありませんし、かと言って、目くらましの空間を解き、プログノス様やルクサリオに危害を加える事は出来ない。・・・やりましょう」

ジーナを批判する事は忘れずに、ファイアは頷き、その無謀な策に乗る事を告げる。

それに、外では現在、プログノスとルクサリオがレニアという、例の魔法を操る少女（？）と対峙をしている為、ここからヴァゼンシグドを出す訳にはいかない。

肉体戦が得意なヴァゼンシグドと、魔法戦が得意なレニア。この2人を一緒に闘わせる事は、なんとしても避けたいところだ。

「わかったわよう！女は度胸！私だって、やる時はやるんだからあ！でも、タコ殴りだなんて、野蛮な言葉は使わないでよね！いい？私のモットーは、常に優雅に美しくなりたいから！」

言葉使いと態度は相変わらずおねえのままだが、そう言ったディールの全身には、凄まじい闘気が立ち昇って行く。こんなにふざけた性格をしていても、ディールはジーナの格闘の師。本気を出しさえすれば、この魔界一の格闘家なのだ。現に、本気ガチバトルでは、まだジーナは、ディールに1度も勝てた事がない。

「はいはい。それじゃ、決まりね。ファイアの鞭と魔法で縛った後で、私と叔父様で優雅にタコ殴りと行きましょうか」

ジーナは、ファイアとディールを見渡し笑う。

「・・・許さんぞ！」

凶暴な人格の方に落ち着いたのか、ヴァゼンシグドは、凍てつきそうな瞳で、ジーナ達を射抜く。

尋常な精神の持ち主なら、ここで悲鳴を上げそうなものだが、ジーナの口元には、これ以上ない位の笑みが浮かべられていた。それは、ディールも同じ様で、2人共、目の前の獲物の剥き出しの闘争心に、心酔しきっているらしい。

・・・本当に、似た者同士の格闘馬鹿・・・。

ジーナとディールには、聞こえない様に腹の中で毒づき、ファイア

も直ぐに臨戦態勢に入る。

重苦しい程の沈黙と緊張感が、周囲を包みこんでいた。

引き寄せられた半身？

場所は戻って、マティス国の大聖堂。周囲は相変わらずの漆黒の闇に包まれ、婚約の儀に訪れた者達は、皆時間を止められ、今は幻と化している。

そんな不気味な沈黙が支配する中で、ただじっと睨み合う、プログノスとラニアの2人。お互いに牽制し合い、互いの隙を窺っている状態だ。

「プログノス様！」

ルクサリオが、プログノスの側に駆け寄る。

「無事だったか、ルクサリオ。先程まで一緒にいた、ファイア殿とデイルス卿の姿が見られない様だが？」

自分に駆け寄って来た、ルクサリオにチラリと視線を投げかけ、プログノスはこの場にいない者達の情報について尋ねる。

「ジーナ皇女様を助けに行くと言って、2人共目くらましの空間へと飛び込んで行ってしまいました。あんな野蛮そうな相手に向って行くなんで。オレは、ファイアの事が心配で……。それに、ジーナ皇女様も……」

ジーナとファイアの本性に気づいていないルクサリオは、彼女達の身を真剣に気遣い、不安そうに顔を曇らす。

「その事なら、きっと大丈夫だろう。デイルス卿は、魔界一の格闘技の腕前だと聞いた事がある。それに、ファイア殿も、あの若さでジーナ殿その侍従長を務める身の上。それよりも今は、目の前の相手に集中をした方がいいだろう」

ルクサリオに安心する様に言い聞かせ、プログノスはラニアをじっと見据える。

「そちも、中々に可愛らしい顔をしておるのう。敵味方に別れた事が、実に恨めしい。妾は、そち達の息の根を止めねばならぬからな」
プログノスとルクサリオの顔を交互に見つめ、ラニアは残念そう

につぶやき、その後、残忍な笑みを浮かべる。

「こちらとしても、幼い姿をしたラニア殿を仕留めなければならぬ事は、痛ましい限りですよ。ですがその前に、聞いておきたい事があります。どうして、私とジーナ殿の身を狙ったのですか？」

警戒を解かぬまま、プログノスがラニアに問う。

「・・・別に。妾には、そち達に対しては、なんの恨みもない。むしろ、そち達魔族の者達がどうしておると、一切興味がないと言っても過言ではないからのう」

「では、何故、この様な事を？」

ラニアの言葉を聞き、今度はルクサリオが尋ねる。

「・・・うむ、そうじゃのう。言うなれば、暇つぶしと言ったところか？妾はヴァゼンシグドに誘われ、面白しろそうだったから、この度の余興に興じる事にしたのだ」

ルクサリオの問いかけに、少し考え、ラニアが答える。

「・・・暇つぶし？・・・余興だと？」

その言葉を聞き、プログノスの整った眉がぴくりと揺れる。

「ふざけるな！お前達にとっては暇つぶしの邪魔だとしても、こちらにとっては、国と民、そして世界のバランスを賭けた大切な儀式だったのだ！」

ラニアの言葉に切れ、プログノスは素早い動作で、風の魔法を操り、無数の鋭い風の刃を、ラニアに向い放つ。

普段は物腰柔らかく、冷静沈着で滅多な事では取り乱さないプログノスだが、切れるとその人格は突如切り替わる。口調が乱暴になり、性格は好戦的になるのだ。普段の性格が真面目で、この300年間の自分達の国の置かれてきた状況に、誰よりも心を痛めている為、どこかでスイッチが入ってしまうのだろう。

「・・・危ないのう。妾の軟肌に傷がついたらどうしてくれるのじや」

ラニアは素早くバリアを張り、プログノスの放った風刃を難なくふさぎ切る。

「当り前だ。そのふざけた口が2度と聞けない様に、ズタズタにしてやるつもりだったんだからな。今直ぐ、私達の国から手を引け！さもないと、そのか細い首を胴体と切り離してやる。いいか、私は本気で怒っているんだ！」

プログノスは叫び、ラニアを正面から鋭く睨む。

「そちは、思ったよりも短気のようにじゃな。残念じゃが、妾は手を引く気はないぞ」

「では、その命を刈り取るまでだ！ルクサリオ、下っっておけ！」

ルクサリオを巻き込まない為に、プログノスは、自分達から距離を取る様に命じる。

「わかりました」

初めて目にした、プログノスの好戦的な一面に驚きながら、ルクサリオはその側から離れて行く。

「では、次は妾から行く！」

今度も、言葉が終わらない内に、ラニアはプログノスの前から姿をくらます。

「・・・消えた？」

ルクサリオは、ラニアの姿を求め、周囲を見渡す。

「そこだ！」

自分の背後に素早く振り返り、プログノスは氷を幾重にも重ねた盾を出現させる。

その盾に、空間から姿を現したラニアの炎の剣が叩きつけられ、シュワツという激しく蒸発する音が響き、プログノスとラニアの間に視界を覆う程の水蒸気が立ち昇る。

「やるではないか」

プログノスの素早い行動に、ラニアは満足げな笑みを浮かべる。

「・・・・・・・・」

そのラニアの言葉には答えず、プログノスは氷の盾を捨て、炎の剣を造り出し、ラニアと正面から切り結ぶ。交えられた剣から、凄まじい熱風が周囲に吹き荒れ、剣を交えあったプログノスとラニア、

そして彼等の闘いを見守るルクサリオの頬を掠めて行く。

「そちは、未来さきを視る事が出来るのじゃな。そうでなければ、妾の最初の一撃で、あの娘もろとも、今頃は炭屑と化していた筈じゃかな」

プログノスと激しく切り結びながら、ラニアが話しかける。

「確かに、私には未来を視る能力がある。そのおかげで、相手の動きをいち早く察知し、それに備える事が出来る。お前の様な化け物を相手に、隠し事をしても無駄だろう。そんな少女の姿をしてはいるが、お前は唯者ではない筈だ。さっきのあのヴァゼンシングドよりも、お前の方が格上になるのではないのか？」

ラニアの問い掛けに、プログノスは自分の能力の秘密を隠そうとはしない。そんな事をして、目の前の相手には何の意味もなさないだろう。

「・・・ほう。そちは、目も利く様じゃな。だが、未来が読めたとして、己の実力以上の物は防げまい。そろそろ、お終いにしようぞ」
幼い外見には似合わない、残忍な笑みを浮かべ、ラニアはプログノスの前から再び姿をくらます。

「・・・ちっ！」

軽く舌打ちをし、プログノスは警戒を最大限に強め、周囲に気を凝らし、ラニアの行方を捜す。その視界の端に、自分に向って来る未来のラニアの姿が映り、プログノスはその方向に体を構える。

「・・・やはり、視えたか。しかし・・・」

プログノスに凄まじい速度で飛びかかりながら、ラニアは口の中でもごもごと何かを唱える。

「・・・かはっ！」

その途端、凄まじい衝撃破に襲われ、プログノスはそのまま後ろに弾き飛ばされ、床の上に背中から地面に叩きつけられる。受け身が取れなかった為、全身がバラバラになりそうな痛み襲われ、喉の奥からは血の味がせり上がってくる。

どうして・・・？

動きなら、先に読めていた筈だ……。

未来を見通しながら、ラニアの攻撃を防ぐ事が出来なかった事に、プログノスは驚いていた。

「何を驚く。妾は、そちよりもずうっと永く生きておる。従って、そちに出来ぬ事でも、妾に出来ぬ事はない」

プログノスの直ぐ側に軽やかに降り立ち、ラニアは不敵な笑みを浮かべる。

「脆弱な魔族にしては、存分に楽しませて貰った。じゃが、それもここまで。そろそろ、遊戯は終いにしようぞ」

プログノスに止めを刺そうと、ラニアは手をかざす。

「……くっ！」

床の上で僅かに体を起こし、プログノスは悔しそうに、ラニアを睨み据える。

「……プログノス様！」

ルクサリオは叫び、主の危機に魔法を発動しようとして試みる。

「……邪魔はさせぬ。そんなに死に急ぎたいのなら、そちから始末をしてやろう」

ルクサリオの妨害に不快そうに顔を歪ませ、ラニアは攻撃の対象を、プログノスからルクサリオへと移す。

「止める！」

プログノスは、ラニアの片手を掴み、自分に対象を向けさせようと心みる。

「うるさい。そちは黙って見ておれ。そして、己の非力さを呪うがいい」

そんなプログノスの胸の上にひよいと飛び乗り、ラニアは冷めた瞳でその顔を見下し、残忍に言い放つ。

「……！」

バキツという、骨が折れる嫌な音が響き、プログノスに激痛が襲いかかる。悲鳴を上げようにも、痛みあまり、満足に声を出す事も出来なかった。折れた骨が数本内臓に突き刺さり、プログノスは

鮮血を吐き出す。ラニアは、見た目の少女の小さな体とは違い、その体重はかなりのものだった。そんな物に飛び乗られたのだから、プログノスにしてみればたまったものではない。

もつとも、プログノスは普段から、戦闘時には魔法力で防御を高めていたので、この程度の『軽傷』で済んだのだと、彼は後のラニアの本当の姿を知った時に、思い知る事になるのだが……。

「……いいのう。美しい男が苦しむ様は……。さて、次は絶望をする所を拝ませて貰おうか。そちの目の前で、かわいい坊やを先に切り刻んでやるぞぞ」

そんなプログノスを、目を細め楽しげに見下ろした後で、ラニアはルクサリオに向い、無数の真空波を放つ。

「……！」

その魔法のあまりの発動の速さに、ルクサリオは動く事も、反撃をする事も出来なかった。ルクサリオはギョツと目を閉じ、体をこわばらせ、死を覚悟する。

「……ちくしょう。」

ルクサリオの危機に、何も出来ない自分のふがいなさを、プログノスは腹の中で呪う。

目を反らす事も出来ず、プログノスは真空波がルクサリオに襲いかかって行く様を、ただ見ている事しか出来なかった。

引き寄せられた半身？

・・・？
・・・来る。
一体、何が・・・？

プログノスの中に、ざわざわとした感覚が広がって行く。
自分でもよくは分からなかったが、懐かしい『何か』が、真っ直ぐにこの場所に向って来る様に直感していた。

「終いじゃ！」
真空波の直撃の瞬間、ラニアは嬉しそうに笑う。

「・・・どうやら、間に合ったみたいだね」
そこに、一人の少年の声が響き、真空波は虚しく空中をかいて行く。

突然現れた何者かが、ルクサリオの体を横に素早くさらっていったのだ。

「そちは、何者じゃ？」
自分の楽しみの邪魔をした人物を、ラニアはぎつと睨む。
「僕の名前は、フォルク。そういう君は、誰？見たところ、いい人には見えないけど？」

赤い長髪に変化したフォルクが自分の名を名乗り、ラニアの全身を興味深そうに眺める。

ルクサリオの危機に現れたのは、人間界から跳躍して来たフォルクだった。何かに引き寄せられ、フォルクはこの場所に辿り着いたのだ。

「ああ、見つけた。僕を呼んだのは、君だったんだね」
視線の先をラニアからプログノスに移し、フォルクは無邪気に微笑む。

「・・・お前は？」

プログノスは、自分達の危機に突如現れたフォルクを、不思議そうに見上げる。初対面の2人だが、吸い寄せられる不思議なものを感じとっていた。

「邪魔をすると言うのなら、そちも殺す！」

ラニアは氷の槍を召喚し、フォルクに向い投げつける。

「・・・縁。この人と安全な場所に避難をしておいて」

ルクサリオの体を縁に預け、安全な場所に避難する様に促した後で、フォルクは自分から槍に向って行き、軽く身を反らしかわした後で、槍を素手でつかみ取る。

「・・・何じゃと！」

ラニアは、最短距離で無駄なく自分の攻撃をかわしたフォルクに、ただ驚いていた。

「それじゃ、今度は僕から行くよ！」

その言葉が終わらない内に、フォルクの姿は、ラニアの視界から消え失せる。

「・・・？何処に行った？」

姿の見えなくなったフォルクを、ラニアは周囲を見渡し必死に探す。

シュツ・・・！という風を切る様な音が耳の直ぐ側で響き、ラニアが驚き振り向くと、そこには自分の召喚した槍を振り切るフォルクの姿があった。

「・・・っ！」

ドガツという鈍い音の後で、槍の直撃を側頭部に受け、ラニアの体は弾き飛ばされ、壁に力一杯叩きつけられる。ラニアの体は1度は壁にめり込む。その後、衝撃に耐えきれなかった壁は、ラニアの体を巻き込んだまま、派手な音を立て崩れ落ちて行く。

「大丈夫だった？」

ラニアの体を吹っ飛ばした後で、フォルクはプログノスに手を差し伸べ、その体を起こしてやる。

「・・・くっ！お前は、私なのか？」

折られた骨の痛みで顔をしかめた後で、プログノスはじつとフォルクを見つめる。

何故だか、全く姿の違うフォルクが、自分の失われた片割れの様に、プログノスには感じられたのだ。

「そうだよ。僕は君の半身だ。今は、体が2つに別れてしまっているけど、僕達は元は一つの存在だった。やっと、ここに戻ってくる事が出来た」

フォルクは、プログノスに笑いかける。

「・・・成程。そちが、300年前にデルタ国から消え去った、第1皇女の子孫という訳か。これで、デルタ国のドラグーンの力が揃ったのだな。ヴァゼンシグドの話では、そちの始末は、あちら側で行うとの事だったが・・・。しくじったと言う訳か」

フォルクに力一杯殴り飛ばされた側頭部を抑え、崩れ落ちた瓦礫の中から、ラニアはよろよろと立ち上がる。そして、ある人物の元で目が止まり、忌々しそうに舌打ちをする。

「まあ、過ぎた事は仕方がない。始末をし損ねたというのなら、ここで止めを刺せばいいだけの事。しかし、それにしても、そちには一切手加減がない様じゃな。妾でなければ、今の一撃で首の骨が折れておつたぞ」

痛みで顔をしかめ、ラニアはフォルクを睨む。

「化け物相手に、手加減なんて必要ないでしょ？それに、君じゃ僕は殺せないよ。僕の片割れも殺させない」

フォルクは、ラニアに不敵に言い放つ。

「・・・面白い」

そのフォルクの言葉を聞き、ラニアの顔は怒りで紅潮する。

「僕の名前は、フォルク。人間界にあるルベア国の第1王子だよ。君の名前は？」

「私の名前は、プログノス。魔界の南半球を統治する、デルタ国の第1皇子だ。まさか、人間界に皇女の子孫がいたとは。これでは、どれだけ探しても見つからなかった訳だ・・・」

この300年間、自分達が見当違いな場所を探していた事に、プログノスは思わず自嘲する。

「オツケ！じゃあ、プログノス。目の前のあの化け物をさっさと退治しよう。僕は、魔法は使えないけど、身のこなしと怪力にはちょっと自信があるんだ。僕が、全ての攻撃をかわすから、プログノスは魔法で攻撃をしてよ。怪我をしてみるみただけど、もう少し我慢してね。後で、僕がとっておきの魔法薬を調べてあげるから」

プログノスの傷を気遣いながら、フォルクはラニア退治を持ちかける。

「わかった。私の体の事は、気にはしなくてもいい。それよりも、招かれざる客を追い返そう」

フォルクの提案に、プログノスは頷く。

「ふざけるな、小僧共がっ！」

怒りで肩を震わせ、ラニアは炎・水・氷・雷・闇といったあらゆる属性の魔法を、一斉に発動させ、プログノスとフォルクに向い放つ。

「・・・行くよ」

まるで、直ぐそこにも出かける様な軽い口ぶり、フォルクはプログノスの肩を引き寄せ、そのまま呑気にラニアに向い歩き始める。

「・・・プログノス様！」

そんなフォルクの無謀過ぎる行動に、彼の助けにより難を逃れていたルクサリオは叫ぶ。

「大丈夫ですよ。私の主は、無謀で無計画な猿にしか見えませんが、ちゃんと確信は持っているようです。それに、どんな攻撃も、フォルク様には当たらないんですよ。まあ、見ていて下さい。それよりも、巻き添えをくわない様にして頂けるとありがたいのですが？私は、まだ死にたくはないので」

今にも飛び出しそうなルクサリオの肩を抑え、縁はおかしそうに笑う。

「・・・はあ」

訳が分からないまま、縁の言う通り、ルクサリオは自分達の周りに強力なバリアを張る。確かに、あれだけの攻撃を一齐に食らえば、自分達の体は、跡形もなく吹き飛んでしまうだろう。

「・・・馬鹿な！何故、当たらぬ？」

自分の放った魔法を全てかわし、ゆうゆうと歩いて来るフォルクとプログノスを、ラニアは驚いた様に凝視している。

ラニアの放った魔法の威力は凄まじく、床は消し飛び、巻き起こった爆風で、視界はゼロの状況に陥っている。普通なら、爆風や衝撃で足を取られ、満足に動ける筈がない。それどころか、今頃は魔法をまともに食らい、重傷を負うか、物言わぬ屍と化している筈。

それなのに、フォルクは呑気な表情を浮かべ、けろりとしている。その様子は、ただ散歩をしている様だった。

一体、何なんだ？

フォルクと共に歩いているプログノスも、今の自分達の状況に驚いていた。

未来を視る事の出来る自分にも、これだけの攻撃を全部かわし切る事は困難だろう。それに、ラニアが放った魔法は、一撃一撃の威力が凄まじく、並の術士では太刀打ち出来ない。それなのに、魔法とは無縁の人間だと名乗るフォルクは、何のアクションも見せないまま、ラニアの攻撃を全て完璧にかわしきっている。

「・・・どうして、当たらぬっ！」

自分に向い、ゆっくりとだが確実に迫って来るフォルクに、ラニアは痙攣を起し叫ぶ。

そして、更に強力な魔法を、立て続けに繰り出す。

標的達は、間抜けにも自分に向い真っ直ぐと向かって来ている。

この至近距離では、今度こそ逃れる事が出来ない筈だ・・・。

死ね！

フォルクとプログノスを見据え、ラニアは愛らしい唇に、残忍な笑みを浮かべる。

「止める！これ以上、前に進むのは危険だ！」

ラニアが放った第2波の威力を瞬時に感じとり、プログノスは無謀な散歩を続けるフォルクに、撤退を訴える。このまま進めば、体が粉々に砕かれてしまうに違いない。現に、ラニアから放たれた魔法は、2人の行く手を阻み、直ぐ前にまで迫って来ている。

「大丈夫だよ。何の心配もいらなくて それより、少し跳ぶから、傷に触ったらご免ね。それと、あの化け物を倒せる強烈な奴を考え
ておいて」

プログノスに至って呑気に答えた後で、フォルクは真剣な表情を作り、そのまま魔法の渦の中へと飛び込んで行く。

「馬鹿めっ！」

無謀なフォルクの行動を、ラニアは嘲笑い、2人に向い最大限の魔力の塊をぶつける。

「・・・！」

プログノスとフォルクの姿が、禍々しい程の魔力にすっぽりと飲み込まれ、ルクサリオは絶望した様に顔を背ける。

その背後では、そんなルクサリオとは対照的に、縁は口元に笑みさえ浮かべ、瞳には映らない闘いの行方を、気配で感じとり見守っていた。

「・・・！」

フォルクに肩を抱えられ、運命共同体と化していたプログノスは、ルクサリオよりも生きた心地がせず、思わず目を閉じる。

・・・？

しかし、何時まで経っても攻撃を受けた衝撃が伝わってこない為不思議そうに目を開く。

「・・・これは？」

そんなプログノスの目に映ったのは、凄まじい魔力の僅かな気流の間を、素早く掻い潜って行くフォルクの姿だった。

「だから言ったでしょ。心配はいらなくて」

自分を不思議そうに見つめるプログノスに、フォルクは笑いかけ

る。

「・・・成程。これが噂に聞いた事がある、絶対回避能力・・・か。これならば、どんな攻撃も当たらない訳だ・・・」

フォルクに受け継がれた、ドラグーンの能力を見破り、プログノスは参ったと肩をすくめる。

代々、ドラグーンの能力を受継ぐ能力者達は、それぞれが異なった能力を授かっている。例えば、ジーナは真理を見破る能力で、当のプログノスは未来を視る能力。それ以外にも、現在の両国の女王・王である彼等の親も、また異なった能力を操る。彼等、能力者が王として君臨しているのは、その与えられた能力を駆使し、世界を安定させる為だ。ドラグーンの能力を受け継いだ時点で、その存在は、半神半人となったとも言える。

そんな中でも、かつてはデルタ国の王家に、極稀に現れていた能力、それがフォルクが持つ絶対回避能力だった。この能力の前では、いかなる攻撃も無効化され、その威力を失ってしまう。つまり言い換えれば、フォルクは常に最高の威力を持つバリアをその全身に張り巡らせ、どんな攻撃も無意識にかわってしまうという事だ。それも、100%の確率で。そこに加え、常識では測りきれない身体能力も、そこに加わる事となる。その為、異常に身軽になり、力も怪力となる。

「へえ、僕の力は、そんな名前だったんだ。気にした事もなかったよ」

自分の能力の名前をプログノスの口から聞き、フォルクは目を丸くしている。実際、自分にそんな能力がある事も、フォルクは気がついてはいなかった。フォルクにしてみれば、ただ何となくここかなど感じる『安全』な場所を、猿の様に身軽な足取りで飛び移っているに過ぎない。

「・・・全く、大した奴だ」

一瞬、フォルクの呑気過ぎる言葉に、今度はプログノスが目を丸くし、その後、こらえ切れなくなっただのか、可笑しそうに吹き出す。

「そう？僕からすれば、魔法が使えるプログノスの方が羨ましいけど」

フォルクは、少し不満そうに唇を尖らせる。絶対回避能力を持つた者は、例外なく、魔法を扱えなくなる。まあ、完璧なバリアを四六時中張り続け、身体能力をドーピングさせているのだから、それは仕方がない事だとも言えるだろう。

「私を持つ能力は、未来を見る能力だ。そのおかげで、相手の動きを先読みし、その攻撃に万全に備える事が出来る。ここからは、私に任せて貰おう。フォルクがラニアの鎧を剥いでくれたんだ、その分以上に、私も働かないとな。あのラニアには、少し恨みがある」
魔力の渦の出口が近づいた事を感じとり、プログノスは端正な唇を、悪戯っぽく吊り上げる。

一方、プログノスの様に未来を見る能力を持つ者は、魔法を得意とする者が多い。相手より先に動いてしまう為、ほぼ100%に近い確率で相手の攻撃を粉碎し、更には、それ以上のダメージを相手に与える事が可能となる。現に、相手がラニアでなければ、プログノスは今は、単身で勝利をおさめていた事だろう。

皮肉にも、300年前に2つに裂かれてしまったプログノスとフォルクは、絶対回避能力と未来予知という、背中合わせだが、最強の力をデルタ国にもたらした事になる。

「それって、反則じゃないの？」

プログノスの生まれ持った能力に、フォルクは羨ましそうに頬を膨らます。

「私から言わせてもらえば、フォルクの力の方が反則だぞ。何を仕掛けても交わされてしまえば、勝ち目がないからな……。少なくとも、私はフォルクとは戦いたくはない」

そんなフォルクに、プログノスも負けじと言い返す。

「「違うない」」

プログノスとフォルクは、同時に同じ言葉を口にし、おかしそうに笑い合う。

おそらくこの2人が戦えば、永遠に決着が着く事はないだろう。

「それじゃ、行くよ！」

「ああ、準備は出来ている！」

フォルクとプログノスは互いに頷き合い、魔力の気流の出口へと飛び出す。

「・・・やったか？」

外では、自らが放った魔力の渦に、飛びこんで行ったフォルクとプログノスの死を、うつすらとだがラニアは確信していた。

「あははははっ！手間を取らせおって」

自分の勝利を確信に変え、ラニアは勝ち誇った様に、高らかに笑う。

「・・・プログノス様。こうなれば、オレがこの手で・・・」

そんなラニアを睨み据え、ルクサリオは主の仇打ちの為、自分が討って出ようとする。

「だから、大丈夫だと言ったでしょうに。全く、貴様のその頭の中には、記憶をするという能力はないのか？同じ事を、何度も言わないで貰いたい。今、外に出て行かれたら、私達は足手まといにしかない。そんな事は、よちよち歩きの幼子でも理解出来そうなものだが」

冷静さを欠いているルクサリオに、縁は何時もの毒舌で、容赦なく言い放つ。

「・・・は？」

さつき初めて会ったばかりの相手に、思いつきりこげにされ、ルクサリオの思考力は、一旦停止する。

今初めて、縁の姿をじっくりと観察をしてみると、年齢は自分より年上の様だ。容姿は整い、切れ者の様な印象を受けるが・・・。

オレは、こいつの事が嫌いだ・・・。

滅多な事で、人を嫌ったり悪く言ったりする事のない素直なルクサリオだが、縁の事を一目で嫌いになる。

それは、縁も同じだった。

ルクサリオとは違い、いきなり暗闇に飛び込んで来た縁には、暗視の魔法が掛けられていない為、その姿は全く見えてはいない。だが、伝わってくる声と気配から、目の前のルクサリオの事を、縁は無意識に毛嫌いしていた。

むしが好かない！

ルクサリオと縁の思考は、見事なほどにマツチしていた。後にその溝は、益々深まって行く事となるのだが、それはおいおいという事で……。

「……随分と、失礼な方の様ですね」

「私は、本当の事を言っただが……」

ルクサリオと縁は、互いの主の危機を一時忘れ去り、そのまま睨み合う。

「一体、誰を殺ったというのかな？」

勝利に酔いしれていたラニアの背後で、何の前触れもなく涼やかな声が響く。

ラニアが驚き振り返ると、そこにはプログノスが立っていた。

「……何時の間に？いや、どうして生きておるのじゃ？」

「さあな、自分で考えてみたらどうだ？それよりも、さつきはよくも、重い体で人の胸の上に飛び乗ってくれたな。お陰で、骨が何本か折れたぞ。少しはダイエットをしる！お前の様にウエストにくびれがない奴は、私は大嫌いなのだ。今度は、こちらの番だ！」

ラニアに向い怒った様に叫び、プログノスは光の剣を魔法で造り出す。

「……ぐうっ！」

自分の圧倒的な振りを感じとり、ラニアは逃げようと後ずさる。

がしっ！その小さな体を、何者かが後ろからはがいじめにし、軽々と持ち上げる。

「逃がさないよ プログノス、何時でもオツケーだよ。遠慮なく、ぶった切ってやって」

ラニアの体をはがいじめにしていたのは、彼女の背後をとったフ

オルクだった。

「・・・そちは」

そんなフォルクを、ラニアは凄まじい眼差しで睨む。

見た目は少女であっても、ラニアの体重はプログノスが話した通り、かなりのヘビー級である。

それは、彼女の本来の姿に関係しているのだが・・・。

そんなラニアの体を、軽々と持ち上げてしまうのだから、フォルクの怪力は半端ではない。

「言われなくとも、遠慮などするつもりはない。立ち去れなどと、生ぬるい事を言うのはお終いにしよう。我がデルタ国と、マティス国を蝕もうとする害虫は、ここで駆除させて貰う」

ラニアの暴虐に切れ、人格の豹変のスイッチが完全に入ってしまったっているプログノスには、一切の容赦はない。

それは、ラニアを掴まえているフォルクも同じ事。いや、フォルクの場合は、何の考えもないと言ってもいい。目の前に悪そうな奴がいたので、ただ退治をしようとしているだけなのだ。それにフォルクは、元より、ラニアの子供の見かけなど、一切気にしてはいない。そういう意味では、プログノスに輪をかけて、無邪気で悪意がない分、更に夕チが悪いと言える。

「消え失せろっ！」

怒りの感情にまかせ、プログノスは力一杯、光の剣をラニアに振り下ろす。

「・・・ぎゃああああっ！」

左肩から右下にかけて、光の剣で真っ直ぐに切りつけられ、ラニアは悲鳴を上げる。

引き寄せられた半身？

「やったね」

フォルクは、ラニアの断末魔の叫びを聞き、無邪気にはしゃいでいる。

「・・・？」

一方、府に落ちなかったのは、直接切りつけたプログノスの方だった。

確かに、両手には肉を切り、骨を断つ感触は伝わってきた。

しかし、何かが引つかかる。

それは、何なのか・・・？

目の前で、フォルクにはがいじめにされ、力なくだりりとしているラニアの顔を、光の剣を構えながら、プログノスが覗きこむ。

「・・・ちっ！成程、そういう事だったのか・・・」

何かを見抜いたプログノスが、悔しそうに舌打ちをする。

「えっ？どういう事なの？」

プログノスが悔しがる理由が分からないフォルクは、今は動かなくなつたラニアの襟首を乱暴に掴み、猫の子を掴む様に吊るす。

ラニアの体は光の剣に裂かれ、切り裂かれた傷口からは鮮血が滴り落ち、フォルクの目には絶命している様に見受けられる。

「プログノス様、よくぞ御無事で！やりましたね！」

自分達に張っていたバリアを解き、ルクサリオが駆け寄る。

縁は、全く目が見えていない為、ルクサリオの袖を拝借し、ちやっかりとその後に着いて来ている。

「出来れば、私の目も見える様にして貰えるとありがたいのだが。

このままでは、満足に動く事も出来ない」

ルクサリオの袖を強く引き、縁は自分の目が見える様にして欲しいと要求を突き付ける。

「・・・」

縁に掴かまれた袖を嫌そうに力一杯振り払い、ルクサリオは、氷の様に冷たい瞳で相手を見据える。

「あれ？もしかして縁、まだ見えてなかったの？」

この場所に着いた時から、はつきりと周囲を見渡す事が出来ていたフォルクが、至近距離から縁の目を覗きこむ。

「私は、ただの人間です。あなたの様に、規格外れのお猿さんとは一緒にしないで貰いたい。それから、その物体を近づけるのは止めて下さい。服が汚れます」

何も映さない瞳で、おそらくはそこにいるであろうフォルクを軽く睨み、縁は血の滴るラニアの体を離して欲しいと、今度も遠慮なく主に言い放つ。

「ああ、ごめんごめん。ねえ、縁の目を見える様に出来る？」

縁の体からラニアの体を離し、フォルクはプログノスとルクサリオを見渡す。

「・・・」

フォルクのその言葉には答えず、ルクサリオはそっぽ向く。自分が召喚している光の妖精を使役すれば、人間の縁の目も見える様にすることは訳ないが、ルクサリオはそれを拒絶する。

誰が、こんな奴・・・

ルクサリオは、忌々しそうに縁を睨む。

「ルクサリオ。見える様にしてやれ。その男は、私の失われた片割れ、人間界のルベア国・フォルク王子の連れの者だ」

何時もとは違い、どこか拗ねた様なルクサリオに、プログノスは自分と同じ魔法をかける様に促す。

「では、失われた力が戻って来たのですね！この方が、第1皇女様の御子孫。よくぞ、御無事で戻られました・・・」

プログノスの言葉を聞き、ルクサリオは希望に満ちた瞳で、フォルクの全身を見つめる。

「・・・レナ、やってあげて」

【ルクがいいなら、レナはオッケーだよ】

そしてその後、嫌そうに顔をしかめながら、レナリスを、縁の中にも送り込む。

「ああ、ようやく見える様になりました。御協力、感謝致しますよ。申し遅れましたが、私の名は天宮 縁。人間界にあるルベア国の第1王子・フォルク様にお仕えする侍従長です」

やっと自由になった視界で周囲を見渡し、縁はルクサリオに話し掛ける。

「オレは、魔界の南半球を統べるデルタ国の第1皇子・プログノス様にお仕えする、侍従長のルクサリオです」

縁に先に名を名乗られてしまった為、ルクサリオも嫌そうに自分の名を名乗る。

「・・・ほう。その若さで侍従長とは。これは、随分と可愛らしい、いや前途有望な方の様だ」

実年齢よりも、ずっと若く見えるルクサリオを、縁は感心した様に見つめる。縁としては、今初めてルクサリオの姿を目にしている訳だが、その容姿はかなりの美少年だった。

「・・・それは、どうも」

固い声音で、ルクサリオはぶつきらぼうに返事を返す。

縁としては、純粹に褒めただけなのだが、普段からの言動が言動な為、ルクサリオにはその真意はストレートには伝わらない。

ルクサリオと縁の間には、主のプログノスやフォルクとは違い、冷え切った空気が流れる。

「皆、仲が良さそう良かった。それで、一体どういう事なの？」

そんな彼等の様子には、一切介せず、呑気そうに笑った後で、フォルクは先程から気になっていた、プログノスの言葉の意味を尋ねる。

「どれどれ・・・。ああ、成程・・・」

フォルクが猫の子の様にぶら下げた、ラニアの体を観察し、縁は一人納得した様に頷く。

「これは、実体ではない」

「どついう事？」

プログノスの言葉を聞き、ラニアを覗きこみ、フォルクは不思議そうに首を傾げる。

「フォルク様、ちょっと見せて下さい」

血まみれのラニアに少し表情を歪ませた後で、ルクサリオはその体を調べ始める。

「・・・これは！有実体ですね。」

ひとしきりの観察を終えた後で、ルクサリオはプログノスを振り返る。

プログノスは、その問いかけに無言で頷く。

「有実体？」

聞き覚えのない言葉を、フォルクは繰り返す。

「いいですか、フォルク様。あなたの頭にも分かる様に言い換えれば、抜け殻の様なものです。つまり、さっきまでは確かに本人はここにいたが、今は姿をくらましてしまっている。とかげが尻尾を切り離し、闇の中に紛れ込んだのですよ。このラニアという相手、中々手強い様です。やはり・・・」

フォルクにラニアが使った手を説明し、縁は最後に何かを言いかけたが、そのまま口をつぐんでしまう。

「・・・へえ」

人間でありながら、魔法の抜け殻を自分より早く見破った縁を、ルクサリオは感心した様に見つめる。

中々、やるみたいだね・・・。

そして、口には出す事のなかった縁に対する賞讃の言葉を、その後腹の中で続ける。

「じゃあ、これはゴミなんだね。早く本体を見つけ出して、今度こそ止めを刺そうよ」

縁の言葉を聞き、フォルクはラニアの有実体を、興味のなくなつた玩具の様に投げ捨てる。

「・・・誰がゴミじゃー！」

そんな一同の耳に、ラニアのかん高い声が響く。

ボウツ！そして、次の瞬間には、有実体は激しく燃え上がり、漆黒の闇を不気味に赤く照らし上げた。激しい熱風が、離れてもなお一同を襲う。

「・・・うわっ！」

フォルクは、ラニアの有実体が燃え上がった事に、ただ驚いていた。

縁とルクサリオは、後もう少し遅ければ、その炎が自分達を焼き払っていたであろう惨事に考えを巡らせ、ただ静かに息をのむ。

フォルクに取っては、何気ない動作の全てが、今日まで彼の身を完璧に護って来ていたのだ。

「何処にいる？尻尾を切り話したままで、本体はこのまま逃げるつもりか？」

縁が例えに出したとかげをそのまま引用し、プログノスは暗闇を見渡し、姿を現さないラニアを挑発する。

「馬鹿を申すな。この様に、見め麗しい獲物が揃っていて、何故妾が逃げねばならぬ？皆、それぞれに趣が違い、中々に鑑賞をしていて飽きぬ」

漆黒に闇の中から姿を現し、プログノスとフォルク、ルクサリオと縁をそれぞれに鑑賞し、ラニアはおかしそうに笑う。その姿と声は、彼等が見守る前で、十代後半の美しい少女の姿へと成長して行く。

「先程は、妾とした事が失礼をした。脆弱な魔族とそち等を侮り、もう少しで本当に死んでしまうところであつたわ。有実体を造り出し、この妾が逃れなければならぬ程の相手。ほんに、胸が躍るのう」
憐れな炭屑と化した、自分の有実体を見つめ、ラニアはプログノスに切りつけられた傷をさする。

プログノスの光の剣が直撃する瞬間、ラニアは自分の体を素早く分裂させ、ほんの一部だけをその場に残し、そのまま姿をくらませた。とはいえ、プログノスの剣の方が僅かに速かつた為、完全に無

傷でよけ切る事は叶わなかった。

「・・・本当に、化け物だな」

どこか妖艶な瞳で、自分達を見つめるラニアに、プログノスはただならぬものを感じとる。先程、子供の姿のラニアに踏みつけられた胸の傷が、再び疼き始め、プログノスは微かに表情を歪ませる。

「・・・成長した？」

姿を変えたラニアを、ルクサリオは呆然と見つめている。

「どんな姿だつて、今度こそ確実に仕留める！」

フォルクは、緊張感の感じられない自然体で、ラニアと正面から向き合う。

「・・・いや。先程とは違う・・・。」

一人、黙っていた縁は、フォルクとは違い、ラニアの変化を敏感に感じとっていた。

「さあ、楽しい遊戯に興じようぞ」

ラニアは、美しい顔に、残虐な笑みを浮かべる。

囚われのジーナ？

一方、こちらはヴァゼンシグドと闘うジーナチーム。

取りあえずは、ジーナとディールが攪乱した後で、ヴァゼンシグドの動きをとらえる事に成功し、フィアはその体を鞭と魔法で縛りあげる。

「……長くは持ちません。……急いで下さい」

思ったよりも強力なヴァゼンシグドの抵抗に、フィアとしては珍しく、弱音にも似た発言をする。

「おのれえ！ふざけた真似をしおって、許さんぞっ！」

実際、動きを封じられた今でさえ、ヴァゼンシグドはその拘束を解こうと、必死にもがいている。

その度に、フィアは振り切られそうになり、必死で気力で押しとどめていた。

「珍しいわね、フィアの弱音って。そんな姿が見られるなんて、ヴァゼンシグドにも少し位は感謝しなければならぬのかしら？でも、こつちも長く待たすつもりはないから。ディール叔父様！」

フィアを軽くからかった後で、ジーナは真剣な表情に戻り、ディールに合図を送る。

「任せておいてえ！魔界一、優雅で美しく、最強と謳われた私の拳技を、その身に叩きこんであ・げ・り・ゆ？」

ジーナに頷いた後で、ディールはヴァゼンシグドにウインクをし、そのまま素早く間合いを詰めて行く。言動はふざけ切っているが、ディールの身のこなしには一切の隙がなく、一見すると華奢なその肉体は、鋼の様に引き締まった筋肉で覆われている。

バシッ！ドガッ！激しい音が立て続けに響き、その度に、ディールの繰り出した拳や蹴りが、ヴァゼンシグドの急所に叩きこまれて行く。

「……ぐっっ！」

一撃一撃が重いディールの攻撃に、ヴァゼンシグドは顔を歪ませる。先程、ジーナに覆っていた鎧を破壊され、今は半分位しか防御が出来ていない。その為、彼等に与えられたダメージは、確実にヴァゼンシグドの中へと蓄積されて行く。しかし、ジーナ達から距離を取ろうにも、ファイアが鞭と魔法で自分を縛りあげている為、動く事も指先一つ動かす事も叶わない。

中々、いいコンビネーションだ・・・。

一方的に、ジーナ達に良い様にやられながら、ヴァゼンシグドは呑気に、敵であるジーナ達の技量を褒め称える。

「・・・たく、しつこいわね！いい加減に、おねんねして貰えないかしら？」

何時まで経っても倒れない、ヴァゼンシグドに辟易し、ジーナは体をしならせて勢いをつけた回し蹴りを、その首筋に叩き込む。

ドガツ！と骨が折れた音に近い鈍い音が響き、ヴァゼンシグドの体は傾ぐ。

「・・・今は、中々に痛かったぞ」

相変わらず動けないまま、ヴァゼンシグドはおかしそうに喉を震わす。

「・・・だ・か・ら、何でそれで倒れないのよ！それに、やられておいて、嬉しそうに笑わないでよね。あんた、変な趣味でもあるんじゃないの？」

そんなヴァゼンシグドを、ジーナは気味悪そうに見つめ、再び休む事無く、ディールと共に攻撃を叩きこんで行く。

外で、プログノスやフォルク達が、ラニアと闘っている間、ジーナとディールも、ヴァゼンシグドに渾身の一撃を叩きこみ続けて来ていたのだ。しかし、徐々に効いてきていたとは言え、ヴァゼンシグドにはまだ何処か余裕が見られる。

。 宝石の修復が終わってしまう前に、早く倒してしまわなければ・・・。

徐々に疲れが見えてきたファイアとディールの身を気遣い、ジーナ

は、さつき自分がヒビを入れた宝石を見つめる。徐々にだが、宝石は修復しつつある。あれが元に戻ってしまえば、また、攻撃が通用しなくなってしまう。

「・・・化け物」

ぼそりとつぶやき、ジーナは考えを巡らせる。

・・・面白い娘だ。

ジーナとディールの攻撃を受け続けながら、ヴァゼンシグドはジーナの姿を目で追いつけていた。一見、華奢でひ弱そうな外見をしながら、その闘争心と攻撃力には目を見張るものがある。

ヴァゼンシグドは、ジーナ達が想像もつかない位の永い永い時間を生きて来ているが、初めて何かに興味を持った。

ニツと、何かを企んだ様に、ヴァゼンシグドの口端がつり上がる。

「・・・!!」

ぞくり……。ヴァゼンシグドの自分を見据える目に寒気が走り、ジーナは思わず後ず去る。

「・・・何？」

警戒を解かないまま、ジーナはヴァゼンシグドに問いかける。

「面白い事を思いついただけだ。そろそろ、こちらも動かせて貰おう。サンドバックになっっているのも、もう飽きた・・・」

ジーナに笑いかけた後で、ヴァゼンシグドは瞳を閉じ、瞑想に入る。その全身を覆っていたどす黒い魔力が、一斉に喉元の宝石に集中して行き、宝石は急速に修復を始めた。

「・・・っ！申し訳ありません……。ジーナ様、これ以上は無理です・・・」

ヴァゼンシグドを縛っていたファイアは、相手の魔力に押し切られ、そのまま後方に弾き飛ばされる。

「・・・！ファイア！」

そんなファイアの体を、ディールが素早く後ろに回り込み、寸での所で受け止める。

「・・・ファイア！叔父様！」

弾き飛ばされた2人の身を気遣い、ジーナが叫ぶ。

「人の心配を、している余裕があると思うのか？」

完全に自由と元の力を取り戻し、ヴァゼンシグドは素早くジーナの前に滑り込み、その体を正面から抱き寄せる。

「・・・なっ！離しなさいよ！」

ヴァゼンシグドのあまりの素早さに、一瞬対応が遅れたジーナだったが、直ぐに闘志を取り戻し、その頬を力一杯右拳で殴りつける。「気の強い娘だ。だが、気に入った。ここには、貴様を殺すつもりで来ていたが、もっと面白い事を思いついたぞ。貴様には特別に、私の子を産む事を許してやろう」

鎧が復活した為、ジーナの攻撃は再びヴァゼンシグドには通用しなくなる。

ヴァゼンシグドは、ジーナの顔を至近距離から覗きこみ、とんでもない事を言い放つ。

「・・・なっ、何を変な事を言っているの？誰が、あんたみたいな化け物の子供なんか・・・！離しなさいよ！」

ヴァゼンシグドの言葉を聞き、ジーナはその腕から逃れようと、力一杯暴れまわる。

「それを言うのなら、ドラグーン的能力を受け継ぐ貴様達も、化け物という事になるぞ？その昔、ローグルとアルグドは、もの好きにも魔族の女を巫女に迎え、子を成した。奴等と同じ事をするだけでは、なんの面白みもない。ただの魔族の女ではなく、あいつ等の娘である貴様に私の子を産ませれば、あいつ等はどんな顔をするんだろっな・・・。クラブジーナ、貴様はどう思う？」

空いていた片方の手で、ジーナの両手を掴み、その抵抗を封じ込み、ヴァゼンシグドはニヤニヤと笑っている。

「・・・」

魂まで凍りつきそうなヴァゼンシグドの瞳に見据えられ、ジーナにはつまい言葉は浮かばなかった。

「ちょっと、あんたみたいな化け物に、大事な姪はお嫁にはあげら

れないわよっ！」

フィアの体を床の上に座らせ、ディールはヴァゼンシグドを睨む。「外野は黙って置け。俺が用があるのは、最初からこのクラベジーナだけだ。貴様の返事など、こちらは最初から聞くつもりはない。少し、聞きわけ良くなつて貰おうか……」

ディールを馬鹿にした様に一瞥した後で、ヴァゼンシグドは視線をジーナに戻し、その首筋に牙を突き立てる。

「……ああっ！」

ジーナの体が激しく痙攣し、全身を焼き付く様な痛みがかけ巡って行く。ジーナの軟肌に食い込んだヴァゼンシグドの牙からは、何かが流れ込み、ジーナの自由と意識を急速に奪って行く。

ヴァゼンシグドがジーナの中に流し込んだのは、相手を意のままに操る為の魔力だった。

……誰が、こんな奴の思い通りなんか……。

薄れゆく意識の中で、ジーナは何とか抵抗を試みるも、全ては無駄だった。

そのまま、ジーナの意識は闇へと封印される。

囚われのジーナ？

「……ジーナ様っ！ヴァゼンシグド！ジーナ様に、一体何をしたいのです……？」

座りこんでいた床の上から立ち上がり、ファイアは手にしていた鞭を、ヴァゼンシグドに向い放つ。

そのファイアの攻撃を、ヴァゼンシグドはあえて受け、自分の片腕に鞭を巻き付けさせる。

「貴様も、大したものだが、悲しいかなただの魔族に過ぎない。従って貴様には用はない。クラブジーナには、少しの間だけ眠って貰っただけだ。最も、私が命じなければ、永遠に目覚める事もないがな……。この娘は、俺の操り人形と化した。貴様には、死んで貰おう」

自分の腕に絡みつく、ファイアの鞭と魔法の威力に関心した後で、ヴァゼンシグドは腕を自分の体の方に引き寄せ、ファイアの態勢を崩す。

「ふざけんじやないわよ！女の扱い方も満足に知らない、この馬鹿男！」

ファイアの首を、手刀で叩き落とそうとしているヴァゼンシグドの首に、ディールは蹴りを叩きこみ、それと同時に、ファイアの身を助け出す。

ヴァゼンシグドは、素早くその攻撃をかわすが、微かにディールの足先がその肌の表面を掠めて行く。

「……？」

ぶしゅ……という小さながし、違和感を感じたヴァゼンシグドが自分の首筋に手をやると、ディールに蹴られた部分の肌が裂け、血が滴り落ちていた。

「成程。男の癖に、ふざけた言葉を使うが、大した奴だ。俺の肌に傷を負わずなど、あいつ等以外には出来ないと思っていたからな……」

「貴様も、中々に面白い奴だ」

自分を傷つけたディールを、ヴァゼンシグドは、どこか敬意にも似た眼差しで見つめる。

「どうして、傷がついたのかしら？ さっきまでは、何をやっても通用しなかったのに・・・？」

完璧な鎧をまとった筈のヴァゼンシグドに、自分の無意識の攻撃が通用した事に、ディールは不思議そうにつぶやく。

「いやん、そんな目で見ないで！ 私に惚れても駄目よお！ これでも一応は、妻と子がいるんだからっ！ それに、私はいいい男が好きなのよう！ あんたみたいな女心の分らない奴は、絶対に嫌なんだからあ！」

しかし、その直後、何時ものディールに戻り、ヴァゼンシグドが自分に惚れたと勘違いをし、半分は顔を赤らめ、半分は本気で嫌がり、体をくねくねさせ始める。

「・・・？何を言っている。貴様は男だろうか？ 俺には、男色の趣味はない」

ディールの勘違いの言葉を聞き、ヴァゼンシグドは大真面目な顔で、否定をする。

「あら、そうなの？ 良かったけど、ちょっと残念だわ・・・」

そんなヴァゼンシグドに、ディールは本気で残念がっている様だ。「・・・こほん。ディール様！ ふざけた事を言っていないで、ジーナ様を助けて下さい！ 攻撃が通用するのなら、ヴァゼンシグドの腕でも、足でも首でもいいから、さっさと吹き飛ばして下さい！」

今は、ヴァゼンシグドに抱えられ、ぐったりとして動かなくなっていたジーナに視線をやり、フィアはディールに本気を出す様に促す。

これがなければ、本当に尊敬が出来るお人なのに・・・。
本当に、残念だわ・・・。

ディールを今一つ尊敬しきれない本当の理由を、フィアは腹の中で嘆く。

「そうよね。何とかしないと、マジやばいわよね・・・」

ジーナが連れ去られるという事は、マティス国からドラグーンの能力者がいなくなる事を意味し、それは結果的に、魔族世界への崩壊へとつながって行く事になる。

ふざけていても、ディールの頭脳は明晰の方だ。

「ジーナは返して貰うわよ！女を本気で怒らせたら、怖いんだから！」

ジーナの奪還を最優先事項に据え、ディールは再び、ヴァゼンシグドに肉弾戦を挑んで行く。

その後、少しの間、ヴァゼンシグドとディールは一進一退の攻防線を繰り返していた。

「・・・！！・・・来たか。随分と遅いお出ましたな」

しかし、何者かが自分達の空間に向って来ている気配を察知したヴァゼンシグドは、憎しみのこもった瞳で、何も無い空中を睨み据える。

「・・・マム。厄介な奴等が来そうだ。今回は、一旦引き揚げるぞ！この檻を、外から破ってくれ！」

ヴァゼンシグドは、ディールから大きく距離をとり、まやかしの空間の外にいるラニアに話し掛ける。

「・・・確かに。折角、血が騒いできたところじゃというのに、ほんに残念な事じゃ」

ヴァゼンシグドの言葉を聞き、プログノスやフォルク達と向かい合っていたラニアは、忌々しそうに舌打ちをする。ラニアはそのまま、ファイアが張ったまやかしの空間に向い手をかざし、破壊の魔法をぶつけ、大きな穴を穿つ。

それと同時に、ファイアが張ったまやかしの空間は打ち砕かれ、ジーナを抱えたヴァゼンシグドと、ディールとファイアの姿も、大聖堂の中に姿を現す。

「・・・っ！」

自分がかけた魔法を、ラニアに強制的に破壊された事により、術者のファイアにその余波が行き、ファイアは顔をしかめうずくまる。

魔法を強制的に跳ね返されると、内側から精神的な破壊攻撃を受ける事になり、術者の精神はかなり消耗される事となる。

「・・・ファイア！」

ファイアの身を気遣い、ルクサリオが側に駆け寄る。

「・・・ルクサリオ。私は、大丈夫です。ですが、ジーナ様が・・・

」

ルクサリオに自分の身の安全を伝え、ファイアはジーナの体を抱えたヴァゼンシグドを指差す。

「・・・ジーナ殿！」

プログノスは、ジーナに向い大声で呼びかけるが、意識を闇の封印されたジーナには、その声は届かない。固く瞳を閉ざしたまま、人形のように動かない。

「ヴァゼンシグド。何じゃ、その娘は？殺したのか？」

自分の側に来たヴァゼンシグドに、ジーナの顔を覗き込みながら、ラニアが問いかける。

「いや、殺してはいない。殺すつもりだったが、面白い事を思いついたので、このまま連れていく事にした」

その後、ヴァゼンシグドは、ラニアの耳元で小声で何かを囁く。

「・・・成程。中々にいい案じゃ」

そのヴァゼンシグドの言葉を聞き、ラニアはおかしそうに笑う。

囚われのジーナ？

「ジーナを返せっ！」

まやかしの空間から出た為、何時もの男らしい口調と態度に戻り、デイルがヴァゼンシグドに叫ぶ。

「返せぬな。返して欲しければ、もう直ぐここに現れる連中と共に取り返しに来い。それまでは、クラブジーナは人質として預かっておこう。最も、貴様等が来たところで、この娘は俺の物。更々、返す気はないがな」

ラニアと並び、一同を見渡し、ヴァゼンシグドはおかしそうに喉を震わす。

「・・・お前は」

その瞳が、フォルクの側に立っていた縁の元で止まり、相手を冷たく見据える。

「そこにいるのが、デルタ国の片割れか……。始末をする様に命じていたのに、その役割を満足に果たす事も出来ず、あまつさえ、こんな場所にまでのこのこと着いて来ていようとは……。縁、貴様には失望をしたぞ」

ドラグーンの力に覚醒をしたフォルクと、縁を交互に見つめ、ヴァゼンシグドは吐き捨てる様に言い放つ。

「・・・えっ？縁って、あの化け物と知り合いなの？」

ヴァゼンシグドの言葉に驚き、フォルクは縁を振り返る。

プログノスやルクサリオ、ファイアやデイルも、彼等の関係が分からず、縁とヴァゼンシグドを交互に見つめる。

「・・・よく言うな。貴様が、私を信頼した事もなかっただろうに・・・。貴様は、私と斑まだらを利用したに過ぎない！今までは、斑の事もあったから、大人しく貴様のいいなりになるしかなかった。だが、それもここまで！私は、フォルク様の配下に下る！そして、貴様の薄汚い手の中から、斑を奪い返して見せる！」

ヴァゼンシグドを睨み据え、縁は自分の決意を伝える。

「……いいだろう。だが、所詮貴様は、今の貴様の主にとっても、そこにいるプログノスにとっても、卑劣な裏切り者にしか過ぎない。こちらから離れるとしても、そちらにも居場所など存在はしないぞ？」

縁の心を揺さぶる様に、ヴァゼンシグドは言い放つ。

「……どういう事だ？」

話が見えないルクサリオは、首を傾げる。

人間の縁が、侵略者と知り合いだった事も驚きだが、ヴァゼンシグドの思わせぶりな口ぶりからすると、自分達デルタ国とも大きな関わりがありそうだ。

「斑を無事に救う事が出来るなら、私の身などどうなっても構いはしない。そんな事より、斑は何処にいる？ ずる賢い貴様の事だ、今もこの場所に連れて来ているのだろうか？」

何処か自嘲した様な笑みを浮かべた後で、縁は暗闇の中を見渡し、誰かの姿を探している。

「泣かせる話だ、いいだろう。美しい兄弟愛に免じ、特別に会わせてやる」

そんな縁を嘲笑った後で、ヴァゼンシグドは手を振り、何かを呼び寄せる。

それを合図に、マティス国の幻と化した参列者の中から、一人の青年が姿を現し、ヴァゼンシグドとラニアの側へと歩み寄る。

「斑！」

現れた人物に向い、縁は彼にしては珍しく取り乱し叫ぶ。

「……」

だが、現れた人物の方には、全くと言っていいほど反応はない。その瞳はガラス玉の様に虚ろで、何も映しだしていなかった。

「……えっ？ 縁が2人？」

現れた人物と、自分の側にいる縁を見比べ、フォルクは混乱する。
「……一体、何がどうなっているんだ？」

プログノスも不思議そうに、2人の人物を見比べる。

ヴァゼンシグドが呼び出し、縁が斑と呼ぶ人物は、縁と鏡を映した様に同じ姿をしていたのだ。

「どちらも返して欲しければ、俺の居場所を突き止め、何時でも遊びに来るがいい。最も、誰一人として生かして帰すつもりはないがな……。行くぞ、斑！」

全員を見渡し、挑発する様に笑いかけた後で、ヴァゼンシグドは背を向け姿をくらませて行く。

「……はい。ヴァゼンシグド様……」

相変わらず、感情のないまま、斑はその後が続こうとする。

「……斑！」

そんな斑に、縁は必死に叫ぶ。

「……」

斑は、自分を呼ぶ縁の声に1度は振り返えるが、直ぐにヴァゼンシグドの後を追って消えて行く。

「こ度は、邪魔が入ってしまったが、次こそは、思う存分楽しもうぞ」

自分の獲者達を見渡し、ラニアは妖艶に微笑んだ後で、気配なく漆黒の闇の中に溶け込んで行く。

それと同時に、周囲を覆っていた闇は晴れ、大聖堂の中に光が戻って来る。

「……くっ」

ヴァゼンシグドとラニアを見送った後で、張りつめていた緊張の糸が切れたのか、プログノスに傷の痛みが蘇り、そのまま床の上に片膝を着く。

「さあ、フィア立って。プログノス様、大丈夫ですか？」

ルクサリオはフィアに手を差し伸べ、立たせた後で、その手をそのまま引き、プログノスの元へと駆け寄る。

「……ああ、心配はいらない。骨が、何本か折られてしまったがな……」

少し青ざめた顔で、プログノスはルクサリオに安心する様に笑いかける。

「それって、大丈夫じゃないでしょ？ねえ、研究室みたいなのはある？僕が、魔法薬を造ってあげるよ。」

ドラグーンの能力を解放した姿から、何時もの人間の姿に戻ったフォルクが、プログノスの前にしゃがみ込み、傷を観察する。

「そうだな。今は、止めた時を戻し、事態の収拾に努める方が先決だ。それに、色々聞かなければならない事もありそうだ」

男らしい表情と口調で、ディールはプログノス達に言い聞かせ、最後に、何かを知っている縁を振り返る。

全員の視線が、縁へと集中するが、縁は覚悟を決めているのか、誰からも目を逸らそうとはしない。

「お待ったせえ！」

そこに、これ以上なく陽気で呑気な声が響き、空間を裂き一人の青年が姿を現す。

「・・・どうやら、呑気な事を言っている場合ではなさそうね」

その背後から、気の強そうな女性が現れ、戦いの後の惨状を溜息ながらに見渡す。

「とんでもない事態が起こった様ですわね」

続いて、穏やかな陽だまりの様な笑みを浮かべた女性が姿を現し、頬に手を当てる。

「この気配は・・・」

まだ、あたりに残っていたヴァゼンシグドとラニアの気配を察知し、最後に現れた落ち着いた青年が、鈴やかな眉根を寄せる。

「・・・？あの、あなた方は？」

突然、空間を切り裂いて現れた男女4人組を、フィアは不思議そうに見渡す。

「ああ、僕達？僕は、マティス国を守護する、ドラグーンのローグル。で、愛しのワイフのレベリナ。よろしくね」

幼さが残る容姿をした、最初に現れた青年が自分の名を名乗り、

横に立っていた気の強そうな女性の紹介も済みます。

「・・・ちよつと！ワイフって、呼ばないでよっ！」

レベリナは、嫌そうに顔をしかめ、ローグルを睨む。

「私の名は、デルタ国を守護する、ドラグーンのアルグドです。そして、彼女の名はウエリカ」

今度は、落ち着いた青年が自分の名を名乗り、横に控えていた穏やかな女性の紹介を済ませます。

「初めまして。私は、ウエリカと申します」

相変わらず穏やかに微笑み、ウエリカは深々と頭を下げる。

「・・・ドラグーン様方？」

相手の正体を知り、一同は固まる。

侵略者の後に、ドラグーン達の登場。

色々な事が一度に起こり過ぎて、頭が混乱しそうになる。

光が戻った為、ルクサリオはレナリス達を魔力の塊に戻し、体内に吸収する。

プログノスは、皆にかけていた時を止める魔法をロードグランに解かせ、彼等の時間を元に戻す。

役目を終えたロードグランは、魔力の塊に戻り、プログノスの中へと戻って行く。

何も知らなかった彼等は、最初は暗闇が晴れていた事に驚き、その後、生々しい戦いの傷跡が残る大聖堂の様子に慌てふためく。

突然、何者かが神聖な儀式を妨害し、両国の間に結ばれた、決して解かれる事のない筈の条約を破棄してしまった。

その上、マティス国の皇女・ジーナを連れ去ってしまう。

更に、神話の中でのしか存在しなかった、ドラグーン達の出現。

マティス国・デルタ国の者達は、激しく動揺し、何時までもざわついていた。

明かされた因縁？

「さあ、出来たよ。これを飲んでみて」

案内された研究室で、プログノスの為の魔法薬を素早く完成させ、フォルクは別室で休んでいたプログノスに手渡す。

ここは、プログノスが傷の療養の為に案内された、マティス国の来賓用の客室の一つ。部屋の中には、他にもルクサリオとフィア、ディールと縁、それにドラグーン達もいる。

「すまない」

ベットに横たわっていたプログノスは、フォルクに助けて貰い体を起こし、出来たばかりの魔法薬を口に運ぶ。プログノスは、最初は苦い味の薬に顔を僅かにしかめるが、直ぐに、体の内側から不思議な安らぎが広がり、ラニアから受けた傷の痛みを和らげていく。

「・・・大したものだ。王宮の薬師だつて、こうはいかないぞ」

人間である筈のフォルクが造った魔法薬の威力に、プログノスは目を細める。

「そう？昔からの趣味で、人間界でも魔法薬の研究をしていたんだ。でも、役に立って良かったよ」

何時もの人間の姿に戻ったフォルクが、無邪気に笑う。

「それじゃ、落ち着いたところで、話を聞かせて貰ってもいいかな？」

一同を見渡し、ローグルが口を開く。

このローグルは、魔界の北半球を治める、ドーグラウ・マティス国の守護竜だ。その容姿は、肩までのちよつと癖のあるショートカットの金髪に、よくくると動く悪戯なブルーの瞳。身長は160cm、体系は小柄で、見た目は十代半ばの悪戯好きの少年の様だ。ドラグーンだと言われなければ、育ちの良い、活発な少年にしか見えないだろう。

「はい。本日は、魔力の安定を図る為に、我がマティス国とデルタ

国の統一を果たすと共に、プログノス様と、ジーナ様の婚約が結ばれる事になっていました」

ローグルの問い掛けに答え、フィアは今はこの場にはいない、ジーナの身を案じる。

「その事は、両国の王より聞き知っていた。私達も、この世界の安定の為に、最前の方法だと判断し、承諾をしたのだが・・・」

フィアの言葉を聞き、アルグドが静かに頷く。

対し、このアルグドは、魔界の南半球を治める、アルグライザ・デルタ国の守護竜である。その容姿は、背中までの柔らかな紅色のストレートの髪に、光の加減では金にも見えるオレンジの瞳。身長は182cmで、細くスレンダーな体型をし、見た目は20歳前半。その言動は常に落ち着き払い、鼻の上にちよんと乗せられた眼鏡が、更にアルグドを知的に見せていた。

今のローグルとアルグドは、お出かけ用の人形をとった姿であるが、人に与える印象は背中合わせである。例えるならば、手がやける生徒と、落ち着いた先生といった所だろうか？

「儀式の途中で、突然視界が闇に覆われ、あのラニアとヴァゼンシグドという2人組が現れたんです。それで、オレ達は二手に別れて闘う事になりました。プログノス様とオレは、ラニアという名の女の子(？)と・・・。ジーナ様とフィア、それにディール様は、ヴァゼンシグドという男と・・・」

ルクサリオは、ヴァゼンシグドとラニアと、戦闘に至った経緯をかいつまんで話す。

「で、こっちの坊やは誰なの？見たところ人間の様だけど、ドラグーンのカも感じるわ」

フォルクを指差し、レベリナが尋ねる。

レベリナは、ローグルの妻だ。その昔、ローグルに見初められ、マティス国の初代女王を産み出した者である。その容姿は、背中までの少し癖のある黒髪に、気の強そうな黒い瞳。身長は168cmで、スタイルの整ったスレンダーな体型。年齢は、見た目では十代

後半といったところだろうか。どこかジーナに似た所がある、整った美貌の持ち主だ。

「僕は、人間界にあるバルジュ・ルベア国の第1王子のフォルク。誰かに呼ばれて、気がついたらここに来てたんだ」

自己紹介と、自分がここに来た経緯を簡単に説明し、フォルクはレベリナに笑いかける。

「彼は、私の失われた半身です。300年の時を経て、私達は再会を果たしたのです」

フォルクの言葉の足りない部分を、プログノスが継ぎ足す。

「では、300年間に行為が知れなくなった、第1皇女の血縁者なのです。ね。ひと先ずは、御身が無事で何よりですわ。フォルク殿、よくぞ戻られました」

プログノスとフォルクを交互に見つめ、ウエリカが穏やかに微笑む。

このウエリカは、アルグドの妻。その昔、アルグドの元に嫁ぎ、デルタ国の初代国王をこの世に生み出した女性である。その容姿は腰までの柔らかな青みかったプラチナの髪に、水晶色の慈愛に満ちた瞳。身長は160cmで、華奢な位の細見、見た目は十代半ば位か。どこかプログノスに似た、儂げな美貌の持ち主である。追記をすれば、ウエリカの瞳は、生まれつき光を映さない。それは、ウエリカが生まれ持った、能力に由来しての事なのだが……。

レベリナ・ウエリカ共に、王となる子を出産後、ドラグーンの牽族に加わり、人ならざる者となり、現在に至るまでの悠久の時を、夫と共に世界の行く末を見守り続けて来ていた。

「まあ、デルタ国に失われた能力が戻った事は良かったよ。問題はマテイス国の能力者が連れ去られた事なんだよね……」

深い溜息を吐き出し、ローゲルは頭をかく。

「殺さずに、連れ去る？ 一体、何が目的なのか？」

アルグドはぼそりとつぶやき、首を傾げる。

「その事でしたら、あのヴァゼンシグドという男は、自分の子供を産

ませる為だと話していました。あなた方の真似をするのはつまらないから、ただの魔族の女ではなく、ドラグーン的能力を継いだ、我が姪・ジーナの身が最適だと……」

ヴァゼンシグドが話していた事を思い返しながら、ディールが話す。

「……成程ね。あいつらしいと言えば、まあ、あいつらしいんだけど……」

ディールの言葉を聞き、ローグルは大袈裟に肩をすくめる。

「でも、女を馬鹿にしきっているわ!」

「私も、そう思いますわ」

レベリナとウエリカは、互いの顔を見渡し、不快感を露わにしている。

「だが、そこまでして、私達に復讐がしたいという事なのだろう。

本当に、困った相手だ……」

眼鏡の奥に、相手に対する憐れみさえ浮かべ、アルグドは溜息を吐き出す。

明かされた因縁？

「それで、お2人と、ヴァゼンシグドの関係というのは？ヴァゼンシグドは、あなた方に恨みを晴らしたいと話していましたか？」

プログノスは、ヴァゼンシグドとローグルとアルグドの関係について尋ねる。

「ああ、大した事はしてないんだよ。君達魔族が生まれるずっと前、この惑星の覇権を巡って、あいつと本気バトルをしたんだ。だってさ、あの陰険野郎は破壊と殺りくが大好きでさ、美しい惑星を壊すっていうんだよ。それに、当時まだ生まれ始めたばかりの、君達魔族の先祖達を、悪戯に殺し始めた」

遠い遠い昔を思い返ししながら、ローグルが、自分達とヴァゼンシグドの関係について話し始める。

「そこで私達は、ヴァゼンシグドの暴挙を止める為に、あの者を成敗しました。力を奪い、2度と悪事が働けぬ様に、その身を地中深く封じたのですが・・・」

アルグドが、ローグルの言葉の先を継ぐ。

「では、何故、ヴァゼンシグドが復活しているんですか？」

ルクサリオが尋ねる。

「簡単よ。要は、逃がしちゃったのよ。というよりは、正しくは、外から封印を解く者が現れちゃったのよ。まあ最も、今はまだ、殺す事も出来ないんだけどね」

そのルクサリオの問いかけに、レベリナが答える。

「わかった！それが、あのラニアなんだね！でも、どうして殺せないの？」

フォルクにしては珍しく話の核心を突き、その後、不思議そうに首を傾げる。

「それは、現在、この惑星が置かれている深刻な状態に関係しています。私も、旦那様からお聞きしたい過ぎませんが、あのヴァゼン

シグドという者は、惑星の魔力を留める要ともいえる宝玉を、封じられる前に奪い去ってしまったそうなのです。そして、今も何処かに隠し持っています。それを取り返さない内には、手出しも叶わない状態にあるのです」

ウエリカが、今もヴァゼンシグドにとどめを刺せない理由を、一同に話す。

「待つて下さい。それじゃ、その核が戻れば、この世界の魔力は安定するのでしょうか？」

フィアが、ドラグーン達を見渡し尋ねる。

「安定すると思うよ。核が奪われてしまった為に、この惑星の魔力は暴走し、僕達は魔力を抑える役割を担う、王達を誕生さえなくてはならなくなっただから。ついでに、この際だから暴露しちゃうと、300年前に、デルタ国の時の王の弟をそそのかしたのも、あのヴァゼンシグドだったりしちゃうんだよね」

300年前の、事件の真相を、ローグルはお気楽にカミングアウトする。

「では、ヴァゼンシグドを捕え、核の在処を聞き出す必要があるという訳ですね」

デイルが、話を結論へと導く。

そのまま、一同は押し黙る。言うは簡単だが、相手もドラグーン。今回の戦いで分かった通り、一筋縄で行く相手ではない。

「・・・核の在処なら、私が知っています」

今まで黙っていた縁が、思いつめた表情で口を開く。

その言葉を聞き、全員の視線が縁に集中する。

「・・・そう言えば、ヴァゼンシグドとも顔見知りみたいだった。あの化け物と、一体どういう関係なんだ？それに、斑って呼んでた、お前にそっくりな男は・・・？」

ヴァゼンシグドが立ち去り際の彼等の会話を思い返し、ルクサリオが縁に尋ねる。

ヴァゼンシグドは言っていた。

縁は、フォルクにとっても、プログノス達にとっても、裏切り者なのだと……。

それは、一体どういう意味なのだろうか？

それと、縁が必死に引きとめようとしていた、彼と瓜二つな青年の正体は……？

「……私は、ヴァゼンシグドに弱みを握られ、そこにいるフォルク様を殺す為に使わされていた暗殺者です」

「ええっ！そうだったの？……でも、そんな事あったかな？」

縁の言葉を聞き、フォルクは驚いた後で、そんな事があつたかなと、必死に記憶を掘り返す。

「……はあ。これだから、このお猿さんは……。いいですか、私はヴァゼンシグドに命じられ、毎日あなたがこちらの世界のプログノス様と再会を果たしてしまう前に、殺そうとしてきました。それなのに、あなたと来たら……。何をやってもかわしてしまっし、あまつさえ、自分の命が狙われていた事にも気がついていない。わかりますか？私の、この苦労が！暗殺の対象者に、何をやっても気がついて貰えないなんて、あまりにも情けな過ぎて……」

これまでの、フォルクとの間抜けすぎるいちごっこを振り返り、縁は少々のが外れた逆切れを披露する。

「そうだったの？ごめんね、気がついてあげられなくて。なんでもさ、プログノスが言うには、僕には絶対回避能力つてのがあるらしんだ。僕も知らなかつただけどさ。あははははっ」

縁の頭をよよしし、フォルクは声を立て明るく笑う。

「……」

暗殺の対象者によよしされ、縁は情けなそうに肩を落とす。

そんな彼等の様子を見ていた他の者達は、善悪の別はともかく、縁に思わず同情を寄せてしまう。

「それで、斑という青年との関係は？それと、核の在処は？」

だらけ切ってしまった場を繕う様に、プログノスが縁に尋ねる。

「斑は、私の双子の弟です。現在の核は、ヴァゼンシグドが斑の中

に埋め込んであります。プログノス様と私達兄弟、それにフォルク様には、切つても切れない深い因縁が秘められているのです・・・」

「深い因縁？」

「プログノスとフォルクは、同時に問い返す。
「そうです。300年前、デルタ国において第1皇女を誘拐した王の弟は、縁者もろとも死罪を言い渡された。こちらの世界では、そう伝わっているではありませんか？」

「確かに。僕達も処刑には立ち会ったし、そう聞き及んでいるけど？」

縁の問いかけに、ローゲルは頷く。

「ところが、生き残りがいたんですよ。弟には、世間には内緒にしていた愛人の女がいました。その女は、弟の処刑後、密かに人間界に逃れた。辿り着いた場所は丹仙国で、人間の男に助けられ、女はその男の妻に収まりました。その時には、女は弟の子をみごもっており、その血脈は薄れながらも受け継がれて行った。それが、私達の先祖になります。更に、女は偶然にも皇女を探し出し、いつの日にかこちらの世界に返せるようにと、手元に置いて養育をしました。せめてもの罪滅ぼしにと・・・その皇女が成長後、ルベア国の王に見染められ王妃となった。そして、その血脈は、時を経てフォルク様に受け継がれたという訳です。つまり私は、300年前にデルタ国を混乱に陥れた、反逆者の子孫という事になります」

縁の思いも寄らなかつた告白に、一同は押し黙る。

「・・・・・・・・」

ルクサリオは、直接関与はしていないにはしろ、自分達の祖国・デルタを危機に陥れた縁を、凄まじい表情で睨む。

当然だと、縁はルクサリオの非難の眼差しを、正面から受け止める。

「どれだけの月日が流れようと、人の感情は変わるものではない。ヴァゼンシグドが言った通り、自分はフォルクにとっても、プログノス達にとっても、憎い仇の縁者にかわりはないのだ。」

明かされた因縁？

「それで？それが、一体何だというの？」

何時もと変わらない無邪気な笑みを浮かべ、フォルクが縁に話しかける。

「・・・何って。いいですか？私は、この世界を混乱に陥れた、無奔人の血を引いているんですよ。それに、あなたの事も何度も殺そうとした！言うなれば、ここにいる者全ての敵です！」

「うん。それは、縁の話聞いて分かった。でも、それって全部さ、ヴァゼンシグドがやらせた事なんでしょ？それに、僕は無事な訳だし、何か問題でもあるの？」

今度は、真剣な表情を作り、フォルクは再び縁に問い返す。

「それは、あなたの生まれ持った能力のおかげです。そうでなければ、私はとうの昔に、あなたの事を亡き者にしていた。そんな事は、あなたにも分かっているでしょう！」

悲痛な叫びにも似た声で、縁はフォルクに言い聞かす。

「確かにそうかもね。でも、逆を返せば、縁は僕を殺す事は出来なかった。この中で一番大きな被害にあってるのって、僕みたいだし、その僕がいつて言ってるんだから、特に問題はないんじゃないの？まあ、僕には全然自覚がなかったけど。それに、縁は何時も、僕に美味しいサンドイッチを作ってくれた。文句を言いながらも、僕に何時も世話も焼いてくれた。ねっ、縁はいい事もたくさん、僕にしてくれていたんだよ」

フォルクは、今度も明るく笑う。

「フォルクの言う通りだな。悪いのは、全部ヴァゼンシグドだ。過去を塗り替える事は出来ないが、未来なら変える事が出来る。ここで、私達がいかがみ合っているのは、それこそヴァゼンシグドの思いつきだよ。今は、ジーナ殿を助け出し、その核とやらを惑星に戻す事が優先事項だろう」

「フォルクの言葉を聞き、プログノスは軽く肩をすくめ、縁に話しかける。」

「・・・全く。あなた方は、どうかしている・・・」

縁は、プログノスとフォルクから、ばつ悪そうに目をそらす。

だが、その内心は、この300年に渡り抱え続けてきた罪悪感を、彼等が綺麗に拭い去ってくれた様で、どこかほっとしていた。

「あなた達、案外、大物じゃない」

プログノスとフォルクを見つめ、レベリナが明るく笑う。

「それで、縁の双子の弟が核を持っているというのは？いかに、先祖に魔族がいたとはいえ、そなた達はただの人間ではないのか？」

アルグドが、疑問に思っていた事を、縁に尋ねる。

惑星の魔力を司る程の核だ。自分達ドラグーンでさえ、ずっと持つていられる代物ではない。それは、ヴァゼンシグドとて同じ事。

それが、大人しく人間の体内に収まっているとは、到底考えられない。

「確かに、体は人間です。しかし、私達は先祖返りを起こしてしまつたんです。ちょうどフォルク様が、300年の時を経て、ドラグーン的能力に覚醒した様に・・・。王の弟の死後、ヴァゼンシグドはずっと、皇女の行方を捜していました。そして、人間界で先にフォルク様を見つけ出し、その後、私達に目をつけた・・・。私達兄弟は、それぞれに特殊な能力を授かっています。斑には、自然と対話をし、寄りつかせてしまう巫女的な能力があります。ヴァゼンシグドは、最初は私に核を埋め込もうとしましたが、私にはその耐性がありませんでした。なぜなら、私が持って生まれた能力は、気や魔力の流れを読み、断つものでしたから。そこで、斑の意識を奪い、核を埋め込んだのです。優れた能力者である斑は、核と見事に融合し、今ではヴァゼンシグドにいい様に操られてしまっています。私は、ヴァゼンシグドを倒そうとしましたが、到底敵う筈もなく・・・。その時に、あの男が取引を持ちかけて来たのです。弟を返して欲しければ、フォルク王子の命を奪えと・・・。私には、他の選択肢

はありませんでした。先祖が一度は裏切り、その後庇護した者を、再び狙わなければならぬとは……」

今日まで、誰にも話す事が出来なかつた苦悩を、縁は吐き出す。

「……300年の時を経て、全てが再び回り始めたという訳ですね」

今になり、急速に回り始めた運命の悪戯を思い、ウエリカは小さな声でつぶやく。

「まあ、今でないとしても、あいつとは決着をつけなきゃならなかつたんだ。ちようど、いい。僕とワイフの愛の結晶^{ジーナ}を取り戻しに行くついでに、その小さな惑星君（斑）も救出して、ヴァゼンシグドを叩きのめしに行こうか」

一同を見渡し、ローグルが悪戯っぽく微笑む。

「だから、ワイフって呼ばないでよ！この馬鹿亭主！恥ずかしいじゃない！」

ローグルの頭を張り倒し、レベリナは、顔を真っ赤にさせ怒っている。

「はははっ 照れ屋さんだな」

「照れてないわよ！私は、怒ってるのっ！」

レベリナに、頭をどつかれても怒鳴られても、ローグルには一向に気にした様子がない。

そんなローグルとレベリナのやり取りを、一同は呆気に取られ見守る。

仮にも、一国を護る守護竜が、馬鹿亭主呼ばわりされるのはいかなものだろうか。威厳も何もあつたものではない。

「気にしないでいいですよ。彼等は、ずっとああですから」

落ち着いた口調で、アルグドがにこりともせず説明を入れる。

「本当に、何時も仲がよろしくて。勿論、私と旦那様も円満ですが」
ウエリカも、そんな彼等には慣れた様子で、にっこりと微笑む。

「ともかく、今はゆつくりと体を休めるように。その間に、私達がヴァゼンシグドの居場所を突き止めておきますから」

プログノスにゆつくりと療養する事を勧め、アルグド達は引き揚げて行くとする。

「あの、ローグル様・アルグド様。さつきから、ラニアという女の子(？)の話が出てこないんですが、何者なんですか？」

自分達を追い詰めた、ラニアの正体が分からずに、ルクサリオがローグルとアルグドに尋ねる。ヴァゼンシグドも恐ろしいが、あのラニアという少女からは、それ以上のプレッシャーが感じられた。

「・・・ああ、あの人ね。・・・うん、まあ・・・何というか、気にしないでもらえるかな？」

振り返ったローグルの活舌は、何処か歯切れが悪い。

「・・・」

アルグドは、何も答えようとはしない。

「魔族や人間にも事情がある様に、私達にも厄介なしがらみがあったね。まあ、一つ言えるのは、敵でも味方でもないってこと位かしら？それじゃ、私達はこれで」

何時もは、物をはつきり言い過ぎる位のレベリナも、言葉を濁し、ラニアの事にははつきりと触れようとはしない。

ウエリカも、困った様に無言で微笑んでいる。

そのまま、彼等は自分達の空間へと引き上げて行く。

いや、十分敵だろう・・・。

自分のへし折られたあばらに手をやり、プログノスは腹の中で突っ込みを入れる。

そのまま、プログノスはマティス国に滞在し、休養する事となる。ルクサリオも看病の為、その側に残る。

フォルクと縁は、何も告げずに出てきてしまっている為、事情の説明に、一旦人間界に戻って行く。

フィアとティールは自国の為、表向きは普段通りの生活をしながら、ドラグーン達の連絡を待つ事となる。

この国の皇女のジーナが不在のまま、数日が何事もなく過ぎ去って行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0785t/>

最凶皇女・ジーナ（タイトル変更）

2011年5月16日17時25分発行